
運営協議会報告書



平成 29 年 12 月 11 日（月）開催

独立行政法人国立高等専門学校機構

秋田工業高等専門学校

は じ め に

秋田高専は、今年度（平成 29 年 4 月に）開校 53 年を迎えております。そして、今年度は、かねて準備をしてまいりました本科の学科改組が文科省に認められ、融合複合分野の基礎知識に加えて、得意とする特定工学分野での高度な専門知識・技術を身に付けた創造性豊かな技術者を育成する新カリキュラムを備えた一学科八コースの創造システム工学科への変革が行われた年でもあります。

秋田高専では、これまでも外部有識者の皆様によって構成される参与会を設置し、毎年 2 回の会議を開催して学校の運営全般に対してご意見を頂戴してまいりましたが、開催回数が多いこともあって、とかく会議そのものが形骸化していた感がぬえませんでした。

そこで、平成 28 年度からは、参与会を拡大発展させた 2 年任期の運営協議会を設置して、秋田高専の教育・研究・社会貢献活動全般について、しっかりとした審議を行って頂くことと致しました。そして、趣旨に沿った審議が叶うような運営協議会規程の策定、協議会委員の人選・委嘱を行ってまいりましたが、平成 29 年 12 月 11 日（月）に、今回の運営協議会 2 年任期の締めくくりとして頂くべく、運営協議会全体会議をホテルメトロポリタン秋田にて開催させて頂きました。会議では、秋田高専のここ数年来の活動状況を高専幹部教職員によって説明させて頂き、それを受けた形での運営協議会委員の皆様による質疑・提言を含めた審議を行って頂きました。

本報告書は、運営協議会全体会議の詳細議事の記録に加えて、運営協議会の設置に関わる規則ならびに協議会委員構成を示したものであります。この報告書が、今後の秋田高専の運営改善に反映されることは論を待ちませんが、秋田高専に関心を持つ諸兄に対しても、秋田高専に対する深い理解に役立つものであることを期待致します。

最後になりますが、運営協議会委員として審議にご参画頂きました皆様には深く感謝申し上げたいと存じます。

平成 30 年 3 月

秋田工業高等専門学校長 米 本 年 邦

目 次

はじめに

1. 運営協議会委員名簿.....	1
2. 学校側出席者名簿.....	2
3. 運営協議会規則.....	3
4. 運営協議会次第.....	4
5. 運営協議会配付資料一覧.....	5
6. 運営協議会場景.....	6
7. 運営協議会議事録.....	8
8. 運営協議会説明資料.....	41

秋田工業高等専門学校運営協議会委員名簿

秋田県産業技術センター所長	赤 上 陽 一
秋田工業高等専門学校同窓会	石 井 昭 浩
秋田工業高等専門学校後援会会長	伊 藤 清 孝
長岡技術科学大学副学長（IR，広報，評価担当）	大 石 潔
秋田魁新報社常務取締役	佐 川 博 之
秋田県中学校長会会長	佐 藤 淳
秋田工業高等専門学校産学協力会会長	菅 原 雅 史
秋田市議会議員	成 沢 淳 子
秋田大学大学院理工学研究科長	村 岡 幹 夫

（敬称省略）

学校側出席者名簿

校 長	米 本 年 邦
副校長（総務担当）	野 坂 肇
副校長（教育担当）・教務主事	安 東 至
副校長（研究担当）・地域共同テクノセンター長	宮 脇 和 人
校長補佐・学生主事	佐 藤 恒 之
校長補佐・寮務主事	石 塚 政 吾
校長補佐・専攻科長	桜 田 良 治
事務部長	藤 原 昇
総務課長	高 橋 紀 夫
学生課長	齋 藤 嘉 光

【陪席】

企画室長	工 藤 奈緒美
企画室企画係員	須 田 康 平

秋田工業高等専門学校運営協議会規則

(設置)

第1条 秋田工業高等専門学校（以下「本校」という。）に外部有識者による運営協議会を置く。

(目的)

第2条 運営協議会は、本校の教育研究活動等の状況について助言及び評価等を行い、本校での自己点検・評価に関する活動を支援することを目的とする。

(任務)

第3条 運営協議会は、次の各号に掲げる事項について、校長の諮問に応じて審議し、校長に対して提言及び助言を行う。

- (1) 本校の教育研究活動等の状況について本校が行う自己点検・評価に関する重要事項
- (2) その他本校の運営に関する重要事項

(組織)

第4条 運営協議会は、次の各号に掲げる者のうちから、校長が委嘱した委員をもって組織する。

- (1) 本校の所在する地域の関係者
- (2) 大学その他の教育研究機関の教職員
- (3) その他高等専門学校に関し広くかつ高い見識を有する者

(任期)

第5条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

2 前項の委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(会長)

第6条 運営協議会に、会長を置き、校長が指名する。

2 会長に事故等がある場合は、校長が指名する委員がその職務を代行する。

(運営)

第7条 運営協議会の会議は、校長が招集し、会長がその議長となる。

(庶務)

第8条 運営協議会の庶務は、企画室において処理する。

(雑則)

第9条 この規則に定めるもののほか、運営協議会の運営に関し必要な事項は、校長が別に定める。

附 則

この規則は、平成29年4月1日から施行する。

秋田工業高等専門学校運営協議会日程

1. 日 時 平成 29 年 12 月 11 日（月）14：30～19：00

2. 会 場 ホテルメトロポリタン秋田

3. 次 第
- (1) 開 会
 - (2) 校長挨拶
 - (3) 運営協議会委員紹介
 - (4) 学校側出席者紹介
 - (5) 日程及び配付資料説明
 - (6) 会長（議長）選出
 - (7) 会長（議長）挨拶
 - (8) 議 事

○秋田高専平成 29 年度の活動について

- | | |
|-----------------|-----------|
| I 総務に関する事項 | 副校長（総務担当） |
| II 教育に関する事項（本科） | 副校長（教育担当） |
| III 専攻科に関する事項 | 校長補佐・専攻科長 |

≪意見交換・質疑応答≫

休 憩

- | | |
|------------------|-----------|
| IV 学生指導に関する事項 | 校長補佐・学生主事 |
| V 寮の運営に関する事項 | 校長補佐・寮務主事 |
| VI 研究・社会連携に関する事項 | 副校長（研究担当） |

≪意見交換・質疑応答≫

- (9) 議長まとめ
- (10) 校長御礼
- (11) 懇 談 会
- (12) 閉 会

配付資料一覧

1. 秋田工業校専門学校運営協議会構成一覧
2. 秋田工業高等専門学校運営協議会規則
3. 秋田工業高等専門学校運営協議会席次
4. 議事説明資料
 - 4－1 総務に関する事項
 - 4－2 教育に関する事項
 - 4－3 専攻科に関する事項
 - 4－4 学生指導に関する事項
 - 4－5 寮の運営に関する事項
 - 4－6 研究・社会連携に関する事項
5. Campus Guide 2017
6. 秋田工業高等専門学校地域共同テクノセンター報／技術・研究シーズ集 2017

運営協議会場景



米本校長挨拶



大石議長挨拶



学校側説明①



学校側説明②



意見交換・質疑応答の様子



運営協議会議事録

(1) 開 会

工藤企画室長：それでは時間前ではございますが、皆様お揃いですので、秋田工業高等専門学校運営協議会を開催いたします。

私は本協議会の議長選出までの間、進行を務めさせていただきます企画室長の工藤と申します。どうぞ宜しくお願いいたします。

委員の方々におかれましては、年末のお忙しい中、ご出席いただきまして誠にありがとうございます。本日は長時間となりますが、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

はじめに、本校校長米本よりご挨拶を申し上げます。

(2) 校長挨拶

米本校長：秋田高専校長の米本でございます。着任してから2年と9か月目に入っております。

実はこの運営協議会でございますけれども、新しく発足させていただいた会でございます。従来、参与会というのがありまして、もう少し簡便な形と言っては変ですけど、回数を多く実施しておりました。それを他の高専に倣いまして、運営協議会という形にして、少し実施間隔は広がりますが、委員の皆様から忌憚のないご意見をいただいて、それを次の年以降の高専の運営に役立てさせていただこうという、そういう会の方針にさせていただいたという経緯がございます。

今日は本校のそれぞれの担当の先生方から高専の状況を説明していただきます。それに関しまして、皆様方から忌憚のないご意見をいただいて、来年以降の学校の運営改善に役立てさせて行きたいと思いますので、是非ともどうぞよろしくお願いいたします。

(3) 運営協議会委員紹介

工藤企画室長：ありがとうございます。それでは本日ご出席いただいております委員の方々をお手元の資料1をご覧くださいながら、ご紹介させていただきます。

秋田県産業技術センター所長 赤上陽一様

秋田工業高等専門学校同窓会 石井昭浩様

秋田工業高等専門学校後援会会長 伊藤清孝様

長岡技術科学大学副学長（IR, 広報, 評価担当） 大石潔様

秋田魁新報社常務取締役 佐川博之様

秋田県中学校長会会長 佐藤淳様

秋田工業高等専門学校産学協力会会長 菅原雅史様

秋田大学大学院理工学研究科長 村岡幹夫様

なお、秋田市議会議員 成沢純子様は都合によりご欠席でございます。

(4) 学校側出席者紹介

工藤企画室長：続きまして、本校の出席者をご紹介させていただきます。

校長 米本年邦でございます。

副校長（総務担当） 野坂肇でございます。

副校長（教育担当）・教務主事 安東至でございます。

副校長（研究担当）・地域共同テクノセンター長 宮脇和人でございます。

校長補佐・学生主事 佐藤恒之でございます。

校長補佐・寮務主事 石塚政吾でございます。

校長補佐・専攻科長 桜田良治でございます。

事務部長 藤原昇でございます。

総務課長 高橋紀夫でございます。

学生課長 齋藤嘉光でございます。

その他、企画室の事務担当者が陪席しております。

（５）日程及び配付資料確認

工藤企画室長：本日の日程を確認いたします。お手元の次第をご覧ください。この後、議長となります会長選出、会長挨拶の後、議事に入ります。

議事の「秋田高専平成 29 年度の活動について」は、それぞれの事項をパワーポイントで説明いたします。ⅠからⅢまでを続けて説明した後、意見交換・質疑応答の時間をまとめて取っております。その後、10 分ほどの休憩を挟みまして、16 時頃から議事の後半、ⅣからⅥを続けて説明の後、意見交換・質疑応答の時間を取っております。それらが終わった後、議長まとめ、校長御礼で 17：00 に一度会議を閉じさせていただきます。その後、17 時半頃から運営協議会懇談会を開催いたします。

非常にタイトな日程となっており、委員の皆様には大変申し訳ございませんが、どうぞよろしくお願いいたします。

次に資料の確認をお願いいたします。配付資料一覧の記載順に確認させていただきます。

まず、本日の次第でございます。1. 構成一覧（名簿）、2. 本協議会の規則でございます。3. 本日の席次表となっております。4. 議事説明資料としまして資料 4-1 から 4-6 まででございます。最後に冊子としまして 5. Campus Guide 2017 と 6. 地域共同テクノセンター報／技術・研究シーズ集 2017 の 2 冊があります。不足等がありましたら、お申し出いただきますようお願いいたします。

なお、本日の会議につきましては、議事録作成のために録音、写真撮影をいたしておりますので、ご了承くださいますようお願いいたします。また、ご発言の際にはマイクを使って発言をお願いいたします。

（６）会長（議長）選出

工藤企画室長：本日の運営協議会の会長選出につきまして、本協議会規則第 6 条及び第 7 条に基づきまして、本協議会の議長を校長により選ばせていただき、お願いすることとなっております。

米本校長から、会長には長岡技術科学大学副学長の大石委員を選ばせていただきたいと伺っておりますので、よろしくお願いいたします。

ここで、会長に委嘱されました大石委員より、一言ご挨拶をいただきたいと思います。

（７）会長（議長）挨拶

大石議長：大石と申します。このような運営協議会は初めてでございます。議事運営頑張り

ますので、皆様、ご協力の程よろしくお願いいたします。以上です。

工藤企画室長：ありがとうございました。

なお、ここからは大石議長に議事進行をお願いいたします。

(8) 議 事

「秋田高専平成 29 年度の活動について」

大石議長：それでは座ったまま、失礼させていただきます。よろしくお願いいたします。これから議事進行を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

では、本日の議題は、「秋田高専平成 29 年度の活動について」となっております。議事次第に順じまして、1 番から 3 番までのご説明を続けて行いましてから意見交換・質疑応答を、それらが終わった後にまとめてさせていただきたいと思います。

最初に 1 番目「総務に関する事項」として、野坂副校長からご説明いただきます。それではよろしくお願いいたします。

Ⅰ 総務に関する事項（スライド No. 1 ～ No. 11 で説明）

野坂副校長：先ほど紹介していただきましたが、総務担当の野坂と申します。私の方からは総務に関する事項ということで、組織、施設の概要、予算の概要そして学校行事、それから私の総務の担当となっております国際交流と地（知）の拠点大学による地方創生推進事業、略して C O C + と呼んでおりますが、この 6 つについて説明させていただきます。

最初に組織についてです。本日開かれております運営協議会でございます。そして学校の最高の議決機関としては運営会議、ここで最終的に全てのことが審議、決定されます。そして副校長としては 3 名おります。私、総務担当、教育担当、研究担当の 3 名でございます。そして校長補佐としては、学生主事、寮務主事、専攻科長となっております。

今年から創造システム工学科の 1 学科になりました。それぞれ機械系、電気・電子・情報系、物質・生物系、土木・建築系の 4 つの専門の系と人文科学系と自然科学系の 2 系を合わせて 6 系という組織になっております。それぞれに系長、一般教科長がおります。

そして図書館長、情報処理センター長、技術教育支援センター長、学生相談室長、事務部長と非常に簡単ではございますが、学校組織としてはこういう組織になっております。

施設の概況ですが、まず敷地でございます。校舎としては 45,461㎡。寄宿舎というのは学生の寮のことで 18,421㎡。運動場が 33,625㎡。職員宿舎がございまして、こちらが 3,757㎡。合計約 10 万㎡となっております。

建物は管理棟、講義室棟、科学技術教育棟。講義室と科学技術教育棟というのは主に 1 年生から 5 年生までの教室です。

そして専門の系棟は先ほど申し上げました機械系、電気・電子・情報系、物質・生物系、土木・建築系、それから研究室、専攻科棟含めまして、9,267㎡でございます。

それから図書館、情報処理センター、技術教育支援センター実習工場・別館、こちらが 2,748㎡、寄宿舎が 5,613㎡でございます。

それから体育館、課外活動施設、厚生会館が 5,221㎡でございます。職員宿舎は 849㎡となり、合計約 3 万㎡で敷地、建物はこのような広さとなっております。

予算の概要について、ご説明したいと思います。まず、昨年度（平成 28 年度）の収入、支出、

決算額をここに示させていただきました。平成 28 年度は、P C B 廃棄物の処理というものがございましたが、これは特殊要因に基づくものですので、ここに資料としてあげさせていただきました収入決算、支出決算からは、その部分は除かせていただきました。

そして収入の方ですが、分類しますと運営費交付金、自己収入、産学連携等研究収入、寄附金収入、その他補助金、施設整備費補助金という項目になっておりますが、ここの自己収入と産学連携等研究収入に関して少し詳しく書かせていただいたのがこちら（次のスライド）になります。

自己収入というのは、授業料収入、入学金収入、検定料収入、雑収入となっております。やはり一番大きいのが授業料収入でございます。191,101 千円という額となっております。

それから産学連携等研究収入でございます。内訳は受託研究収入、共同研究収入、受託事業収入、間接経費収入です。いわゆる科学研究費の間接経費と呼ばれる部分です。この内訳はこのようになっております。

前に戻りまして、収入の中ではここの自己収入という部分が 61% を占めております。217,616 千円と収入のほとんどを占めております。

運営費交付金、自己収入、その他補助金、そして施設整備費補助金、これらの項目に関しては機構管理となっております。本校の独自の収入部分としては、産学連携等研究収入、それから寄附金収入になります。ほとんどが機構の管理となっております。

支出の方ですが、教育研究経費が 204,572 千円でございます。こちらが比率としては 58.5% を占めております。その他一般管理費が 23.8%、産学連携等研究経費、寄附金事業費、その他補助金、施設整備費、このようになっております。その他補助金、それから施設整備費補助金に関しては、収入と支出が同額となっております。

決算額の合計ですが、収入と支出が完全には一致しておりません。これは産学連携等研究収入と寄附金収入、ここの部分で繰越、あるいは積立というのが 600 万円から 700 万円程ございますので、ここでは完全には収入の決算額と支出の決算額が一致はしておりません。

こちらが予算です。平成 28 年度予算と平成 29 年度予算を比較させていただいております。ほとんど自己収入は変わりません。授業料収入以下は、自己収入の内訳を示した部分です。

運営費交付金としては、平成 28 年度予算が 5,306 千円に対して、平成 29 年度予算が 55,173 千円と 5 千万円近く増えたということになっております。

しかし、先ほども少し申し上げましたが、今年から 1 学科になりました。学科再編が行われまして、学科等再編推進経費として 56,000 千円ほど本校に配分されておりますが、ここで増えているのは 50,000 千円です。実は 6,000 千円程減額になっているということです。これは運営費交付金というのは、毎年少しずつ減額されております。

次に年間行事についてご説明します。今年度は 4 月 2 日入学式、4 月 3 日の始業式に始まりまして、5 月に前期中間到達度試験、6 月 2 日からは、3 年生以下は高校総体にも参加しております。6 月 17 日からは保護者面談期間ということで、担任と保護者が面談を行うという期間を設けております。7 月 1 日、2 日には東北地区高専体育大会。24 日には前期末到達度試験が行われています。8 月 3 日からは学生は夏季休業に入っておりますが、5 日にはオープンキャンパス、これは中学生及び保護者、中学校の教員を対象としたもので、行わせていただきました。詳しい内容はまた後で教育担当の方からお話がございます。そして 8 月 18 日から全国高専体育大会。夏休み明けになります 9 月 20 日には特別講演会を開催しております。今年は高松高専の卒業生で、現在北海道大学の教授をされております小笠原先生を講師としてお招きしてご講演

をいただいております。9月27日、28日はスポーツ大会、これが前期でございます。

後期は10月から12月の頭までは色々な大会等が多くなっております。10月1日には東北地区高専ロボコン大会が行われました。その後、全国高専プロコン大会。それから東北地区高専ラグビー大会、12月にはデザコン大会。12月3日には全国高専ロボコン大会。今年は秋田高専も全国大会に出場しております。このような各種大会が行われております。

10月28日と29日には高専祭が行われております。2日目の29日に進学ガイダンスが行われております。先ほどと同じように中学生対象です。こちら後ほど教育担当の方から少し詳しく説明いたします。

11月15日からは4年生が主に関東地方の工場見学に行っております。

今週の土曜日になりますが、12月16日は4年生の保護者進路相談会がございます。4年生は来年5年生になりますと、すぐ就活等が始まります。それに先立ちまして、保護者進路相談会を開催いたします。

1月11日は3年学習到達度試験というのがございます。これは全国の高専が統一した問題で行います。学習の到達度がどのくらいなのかということ判断する試験になっております。

1月20日になりますと、いよいよ来年30年の推薦選抜入学試験がございます。2月18日には学力選抜入学試験が引き続いて行われる予定です。

2月13日から後期末の到達度試験がございます。3月3日からは臨時休業、3月20日からは学年末休業ということになっております。3月17日には卒業証書、修了証書授与式がございます。

大まかな行事だけですが、年間このような行事予定となっております。

次に先ほど申し上げました、私の所掌となっております国際交流について、簡単にご説明いたします。

現在フランスのリール地域技術短期大学、フィンランドのトゥルク応用科学大学、それからベトナム中央地域工科経済水資源大学、これらと学術交流協定を結んでおりまして、こちらから派遣もするし、向こうから受け入れもするという協定でございます。まだまだ人数は多くはないですが、こちらから派遣したり、受け入れたりと国際交流を進めております。

最後にここにありますシンガポールポリテクニクというのは、学術交流協定ではなく、語学研修という意味合いが強いものですので、こちらからは語学研修には出ていきますが、向こうからの受け入れは基本的にございません。平成29年度は1名の記載となっておりますが、これは11月30日現在の数字ですので、来年の3月には今年度も語学研修に行く予定になっており、現在計画を進めているところです。

最後になりますが、地（知）の拠点大学による地方創生推進事業、COC+と呼んでおりますこの事業についてご説明いたします。これは拠点大学というのは秋田大学になります。そこに秋田県立大学と秋田高専が参加大学という形で参加しております。

COC+は3つの柱で展開しております。第1の柱が「6大学連携による『秋田おらほ学』の展開」。第2の柱は「3大学と地元企業群による就業支援・若者定着システムの形成」。第3の柱は「ふるさと秋田の魅力形成モデルづくり」。こういう3つの柱がございます。

その中で、本校はこの第2の柱、こちらの方を主に展開していくという計画になっております。到達目標としては、地域教育プログラムというものを作成いたしまして、その認定制度によって卒業生をなんとか地域定着、拡大していきたいというものです。それからAターン採用によって、即戦力となる人材を地域に定着させたいということです。

新卒者の県内就職率を2019年までに現状の10%増加させる。10%増と申しますのは、2015年、16年ぐらいですと全体の10%少しで、そこに+10%という意味ですので、就職希望者の20%、凡そですが、本校は27名、このくらいはなんとか県内就職に結び付けたいということで今活動を行っているところです。

先ほど申しました地域教育プログラムですが、こちらの進捗状況です。COC+というのは平成27年度のかかなり遅い時期に認められたものです。そのため、COC+授業としては平成28年度から開講しまして、平成28年度は4年生に地域史、それから地域産業Iというものを開講しました。

研究会としては2回、東京と秋田で行っております。先ほど申し上げましたが、Aターンに繋がるよう研究会を行いました。秋田県内の企業の方から、県内企業の魅力を講演していただく、そういう活動しております。

講演会でございます。これは校内で1年生から専攻科生までを対象として、平成27年度は1回だけでしたが、平成28年度は8回、今年度は既に5回行っておりまして、今後3回程予定しております。

研修会でございます。こちらは本校のシーズを県内企業の皆様に知っていただくという研修会を行っております。これも平成28年度は2回、今年度は既に1回終わっておりますが、今後2回程予定しております。

先ほど申し上げました、新卒の県内就職率を20%くらいまでもっていききたいという数値目標ですが、平成27年度は12.8%でした。平成28年度は27名、22.7%と目標を達成したのですが、平成29年度は10月31日現在の数字であります。少し苦戦しております。

以上、簡単ですが、私の担当する総務に関する事項を説明させていただきました。

大石議長：野坂先生、ありがとうございました。続きまして、議事次第2番の「教育に関する事項（本科）」を安東副校長・教務主事の方からご説明をお願いいたします。

II 教育に関する事項（本科）（スライドNo.12～No.43で説明）

安東副校長：それでは、私、安東の方から教育に関する事項として、本科を中心に説明をさせていただきますと思います。

最初に高専の位置付けについてでございます。本来であれば中学校を卒業しますと高校へ行きまして、その後大学受験をして、大学に入学し、更に大学院に進学をしたり、あるいは短大に進学をして就職という形が多いですけれども、高専の場合はご存じのように中学校を卒業し高専に入りますと、高専は5年の課程でありますので、ちょうど短大と同じ年に卒業ということになります。

また、高専を卒業した後、大学に編入学する学生もおりますし、2年の課程の高専の専攻科、こちらの方に進学して、就職あるいはその後大学院に進学という場合がございます。

高専を卒業しますと、準学士の学位になりますし、高専の専攻科を卒業しますと大学4年生と同じように学士という学位を授与され卒業するということでございます。

なお、教育については1番から12番までございますので、この順番に沿って、説明をしていきたいと思っております。

まず始めに4月1日時点の学生の在籍状況についてご説明いたします。今年度の4月の時点での状況でございます。

1年生は、この後お話ししますが、改組をいたしましたので、学科は区別なく168名を受け入れております。2年生以上になりましたは、入学した時点で学科が分かれております。648名の学生の内女子学生は、2年生以上で132名、1年生は40名が入学しております。

また、専攻科に関しましても、生産システム工学専攻と環境システム工学専攻を合わせて40名の学生の内2名が女子学生でございます。

従って、1年生と648名を足し合わせまして、本科の学生だけだと、818名、内女子学生172名が本科では在籍をしているということでございます。

先ほどお話しました学科改組について、次に説明をしていきたいと思っております。これまで本校は昭和39年に設置され、その後環境都市工学科、昔の土木工学科が設置されて以降、4学科体制で学校が運営されておりました。1年生に入学した時点で、自分のこれから先、将来学ぶべき学科が決まっていたという、そういう学科体制でございました。

この4学科体制で、入学時に専門分野が決まっていた訳ですが、実は入学した後で、各専門で何を学ぶのか、その違いが良く分からないという声もよく聞こえてまいりました。と言いますのは、例えばロボットでありますと、機械と電気の分野を横断したような分野というようなことでございます。それに類することがいろいろありまして、実際自分がやりたいことは一体どの学科に入れば具体的にやっていけるのかということがよく分からないということ、いろいろ質問を受けたりもししておりました。

また、最近では入学した後、自分が進みたかったのは本当にこの学科だったのだろうかということで、場合によっては転科（学科を他の学科に移動していく）という学生もほんのわずかではありましたが、1～2名おりました。これはなかなか従来なかったことでございます。

それが社会情勢も変わってきてまして、就職する側、企業の方々からは是非その自分が学んだ分野でずば抜けた高度な得意分野、この領域だけは誰にも負けないというような、そういう分野を持って欲しいという要望であるとか、あるいは自分の専門分野以外であっても、基礎的な知識だけでもいいからしっかりと学んで欲しいというような要望がございまして、現状のこれまでの体制ではなかなか厳しいところがあるということで、学科体制を抜本的に見直しましょうということになりました。

そこで、育成すべき人物像をいろいろと考えてきた訳でございますが、これから望まれる技術者像に関しましては、自分の専門分野の所は従来よりも飛び抜けた専門領域を作ると同時に、裾野を広くしまして、他の分野のことまでも基本的な部分で構わないから、しっかりマスターできるような、そういう学生、こういう非常にとんがった学生をこれからは育成すべきではないかということで構成をいたしました。これまで秋田高専は4学科体制という下地、バックグラウンドがございましたので、それに重ね合わせました。そうしますと一つの学科の中でも、2つほど専門分野と言われる領域を少し括ってもいいのではないかとということで、機械系2つ、電気系2つ、物質系も2つ、それから環境都市関係も2つということで、それぞれこのような形になりました。従来からの機械系、ロボット関係、電力関係、情報関係、それから昔からの化学関係、バイオ関係、土木関係、デザイン関係という形で従来の学科体制の上にそれぞれ2つずつ重ねるような形での新しい体制を構築しようということでございます。

それでできましたのが、こちらにあります創造システム工学科で平成29年4月から設置された新しい学科でございます。1年生では大括り入学をさせまして、入学した時点ではそれぞれ将来自分の専門はどこを学ぶのかは確定をしておりません。1年間かけて、機械系のことも、電気も物質もそれから土木関係のことも、基本的なもののづくりという観点だけでも、

1年生の時に勉強していただいて、それぞれ4つの系の内容を見学したり、紹介したりということをしていろいろやって、2年生になる直前に最終的にそれぞれ志望をだしまして、自分の希望する分野に分かれていっていただきましょうという体制をとっております。その後3年生までをそれぞれの系の基礎分野を勉強しました後、4年生から自分の希望に沿ったコースに定員なしで、ここは進んでいただこうと考えております。

なお、科目に関しましては、こちらにあるように系共通科目があります。もちろんコースの専門科目、共通の必修科目もございますが、裾野を広げるという意味で他の分野と重なる融合分野、複合分野に関してもこのような形で分け、5年生になりますと融合、複合の分野が増えてくるという体制をとっております。

これは具体的な科目が書かれております。ちょっと字が小さくて申し訳ございませんが、1年生は専門科目は3つだけでございます。工学概論、情報基礎、ものづくり工学実習を160名全員が勉強いたします。

それから2年生から3年生はこの分野で基礎的な内容を学び、4年生から5年生、図では大きくなっておりますけれども、このような科目がそれぞれ設定されているということでございます。また、このように4系横断型の融合選択科目であるとか、そういう科目を配置しております。

その他、この複合選択科目として設定されておりますが、それぞれの系で2つずつ科目を出し合いまして、自分が今在籍しているコース以外のコースの科目を必ず選択するという形をとっております。

次に入学者受入方針の制定でございます。これまでも本校では入学者受入方針を制定しておりましたけれども、改めて昨年入学者のアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシーそして、ディプロマ・ポリシーを制定して、ホームページに掲載しております。

この入学者受入方針に沿って、入学者確保の取り組みを行っております。8月にオープンキャンパス、10月末には進学ガイダンスを高専祭に合わせて行っております。一生懸命取り組んでいるつもりではございますけれども、やはり少子化の影響もありまして、なかなか人数が毎年減ってきているかなという感じでございます。

それから実際の入学志願者状況でございます。平成29年からは創造システム工学科で募集をしております。倍率は、1倍か、ちょっと超えるくらいでございます。

なお、こちらは女子志願者数の推移でございますが、ここ2年ぐらいは30名から40名ぐらいの間で推移しております。今年度は40名の女子学生が入学をしております。

なお、地域別の志願者の比率でございますが、やはり秋田市を中心とした都市部、そこに人口が集中しているということもありまして、毎年この秋田市を中心とするところから通って来ることができる学生が多い状況で、本校だけではないと思いますけれども、こういう傾向にあるという状況でございます。

次に卒業認定方針についてでございます。本校ではここに示した(A)から(E)の5つのキーワードを基にして、それぞれこの5つを達成目標として達成した学生を卒業させましょうという、認定方針を設定しております。

この認定方針に沿って、どういう科目を勉強させればいいのかについてカリキュラムを組む上で教育課程方針、即ちカリキュラム・ポリシーを設定いたしました。それぞれの卒業認定方針の1つにつき、2つから4つの方針をそれぞれ具体的な方針を立てまして、この方針に沿った形ですべて科目を割り振って、それで授業の方針を決めております。

実際に科目関連表ですが小さくなってしまっているので一部でございませけれども、こういう形でそれぞれのコースに（A）人類の幸福であれば一般科目，（B）工学基礎知識の修得であれば、それぞれのコースでこういう科目がこの部分に相当するという形で、一つ一つ設定をして、これがずっと下まで（E）のキーワードまでであるということとございます。

この他、これは本校だけではなく高専機構で設定されているものでありますが、モデルコアカリキュラムというものが設定されております。

まずコアカリキュラムというのがありまして、これを国立高専すべての学生に到達させるということを目標とする最低限の能力水準ということで、最低限このコアカリキュラムの内容は、達成をさせることということになっております。本校もこのコアカリキュラムに準じた形でカリキュラム、授業内容を設定しております。

またモデルというのがございます。これは高専教育をより一層の高度化を図るための指針という形で示されているものでありまして、2つ合わせてモデルコアカリキュラムという形で設定されております。本校の授業カリキュラムもこの方針に沿って構成をされております。

また、授業内容はWebシラバスという形で、ホームページ上からすべての高専のシラバスがチェックできるような形になっております。そして、科目間の紐付けがどうなっているのかというのも確認できるような構成になっております。これは例として私の科目のWebシラバスの一覧でございます。教科に関しましては、このルーブリックという達成度評価という形で評価をするようになっております。

また、第1週目から終わりまで、毎週何を学ぶのかということまで詳しく一つ一つ設定がされております。

こちらにありますように評価方法もきちんと設定されて、これに準拠した評価方法を行っております。

その他本校では、Eラーニング、アクティブラーニング推進のためのICT環境の整備、これを継続して現在も行っております。その他複数クラスに対応した多目的教室の整備も現在取り組んでいる最中でございます。

また、学習サポートとしましては、TA（ティーチング・アシスタント）などを活用して、学習アドバイザー制度、放課後に授業がわからないという学生については、上級生が下級生に対して教えてあげるといような、そういうアドバイザー制度も作って実施しております。その他TOEICを始めとした外部の試験の指導サポートも行っております。

今度は計画でございます。グローバルエンジニア育成事業というものを計画しております。先ほどもお話ししましたが、本校では都市部からの入学生が多くなりまして、高専の寮が丸々一棟現在空いている状況でございます。それを有効活用しようということで、中学校と高専のエンジニアリングキャンプ、これは中学生を対象にしておりますが、中学3年生をメインの対象として参加人数30名ほどで、英語の特別カリキュラムと課題解決型のカリキュラムを一緒にした形の早期技術者教育を実施したいと考えております。

また入学生に関しましては、1年から3年生まではグローバル基礎プログラムと題しまして、国際教養大学と協力して、英語教育を強化していきたいと考えております。英語による授業も順次実施していきたいと考えております。

それから、5年生になった時には、これが一番の特徴かと思いますが、5年の後期に卒業研究単位として読み替えができる長期海外技術研修、これを実施したいと考えております。そのための準備を今着々と進めているところでありまして、最終的にはTOEIC600点以上よりも高

いコミュニケーション能力を身に付けさせたいと考えております。

全体の概要を示すという形になろうかと思えます。こちらの赤いところが5カ月間の長期海外技術研修という形になります。

この実施体制図でいきますと、こちらにあります長岡技術科学大学、あるいは国際教養大学からいろいろなアドバイスをいただきながら、県との協力、産学協力会、工学教育協会のような学会の協力も得て、なんとか実現をしていきたいと思っております。

その他、高専の寮を有効活用し、夏休み期間中通って来られない学生などをそこに宿泊させて、長期休みを利用した英語の集中講義を実施していきたいと考えています。

最後に進路関係について報告をいたします。これは昨年状況です。今年と大きく変わってはおりませんが、こちらは今年の10月31日現在の状況でございます。

数字でこちらに書かせていただいておりますけれども、グラフにしますとこのような感じになります。5年生の進路状況としては3割ほどが進学、7割が就職という形でここ最近推移をしております。進学している学生の内、大学進学が50%から60%、専攻科はそれを少し下回るぐらいで推移をしております。

なお、就職、進学共に進路が決定したという形での進路決定率というのは、ここに見てお分かり頂けるように、ほぼ100%で推移をしております。ここが少し下がっておりますが、実は本校は1名いないだけで、結構比率が下がってしまいます。1名というのは、例えば自宅であるいはどうしても就職しないで1年間どこかに旅行してみたいとか、そういう学生がたまにいますので、こういうことが起こるということでございますが、学生の希望はほぼ100%叶っているという現状でございます。

こちらは進路関係、主な就職先です。ご覧のとおり、一部上場の大手企業に就職しているというのがわかりいただけるかと思えます。こちらは県内の主な就職企業でございます。

それからこちらは進学先でございます。赤い色に関しましては、ここ数年、毎年のように多くの学生が進学をしている学校ということで、ちょっと色を強調させていただきました。以上になります。

大石議長：どうもありがとうございました。続きまして議事の3番目「専攻科に関する事項」ということで桜田専攻科長よりご説明をお願い申し上げます。

III 専攻科に関する事項（スライドNo. 44～No. 54で説明）

桜田専攻科長：専攻科長の桜田でございます。私の方から簡単に、専攻科の概要をご説明させていただきます。

先ほど来ご説明にありましたとおり、専攻科は5年を修了した時点で、さらに2年間、深く専門を勉強しましょうということで、資格そのものは先ほどもご説明にありましたとおり、大学卒と同じ学士ということになります。学士ということになりますけれども、これは私どもが学士を出せる訳ではございません。あくまで外部の機関、大学改革支援・学位授与機構に申請いたしまして、その審査を通りましたら与えられるということでございます。

特例適用認定を簡単に説明いたしますと学位授与機構に行って、ペーパー試験を受けなくても、申請しました課題が審査を通ればそのまま学位授与機構から学士が授与されるという方式に平成27年度から変わっております。それに本校も参画しております。それ以前は学位授与機構に12月の3週目にペーパー試験を受けに行きまして、2月の時点で審査がわかります。過去

にはそれで残念ながら不合格となった学生もありました。そうしますと6月時点で就職が決まっておりますけれども、内定も取り消しという事例もありました。ある意味、リスクを持っているという状況でございました。

私どもが専攻科を設置したのは全国の中でも非常に早くて、平成6年でございます。このとおり所帯が小さいものですから、大学と同じように各学科単位での設置という訳には参りませんので、融合の形をとってございます。いわゆる機械系と電気系を融合しまして、生産システム工学専攻、環境システム工学専攻というのは、化学系と土木建築系を融合しまして一つの専攻という形をとっております。定員は8人ずつでございますので、合計16人。本科の1割の16人が定員でございます。

教育の特徴でございますが、先ほど申しましたとおり、機械と電気、化学と建設という複合教育を取っております。そしてまず一つの特徴としましては、1年生の段階でも実験があるということでございます。生産システム特別実験、環境システム特別実験がそれでございます。それぞれ出身母体がありますので、機械系の出身の学生も電気の実験をします。電気系出身の学生も機械の実験をすることになります。化学の学生も土木・建築の実験をします。土木・建築の学生も化学の実験をします。これは、なかなか他の大学の学部ではあまり例はなかろうかと思えます。と申しますのは、ある企業を訪問した際に、一つの橋梁メーカーでございましたけれども、鉄骨を組み立てて、電波塔なり、橋梁を組み立てて行く訳ですけれども、「これはすごいシステムですね」というお褒めの言葉をいただきました。橋梁ですから、維持管理も入ってまいります。その塗料の化学の専門知識は、土木のエンジニアは持っておりません。それを、ただの知識だけではなくて実験まで行っている。「これは非常に、私どもにとってはありがたいことです」というお褒めの言葉もいただいております。

2つ目でございますが、一貫教育ということで、今専攻科と申しますと外部から判断されますのが、いわゆる本科の4・5年生+専攻科の1・2年生で取得できる学位は学士というように認識されがちです。すなわち、専攻科=学士みたいになっておりますけれども、本来高専は50数年やってまいりまして、高専5年終えた段階で学士と同じ位の学力、それから知識を身に付けるということを目指してやっております。

ですから本当の意味合いは、専攻科2年間となりますと、更にその上を教育していくという気概でやっております。事実上は5+2ですから、7年間の一貫教育に近い形をとっております。

それから3つ目でございますが、せいぜい8人の少人数教育をとっており、マンツーマンに近い形で研究の方もやっております。実際上は、本科5年生1年間の卒業研究、専攻科に進んで2年間の特別研究とこれで3年ですけれども、さらに4年生で基礎研究をやっておりますので、事実上足かけ4年の研究を集中してやれるということが特徴かと思えます。

もう一つは、少人数でのインターンシップがあります。本科の時は、手探り状態で企業等にインターンシップに行っておりまして、それが専攻科で自分の将来の専門も煮詰まってくる状態で、更にもう1回企業を見学して勉強してくるという学生がおります。この辺は、一大特徴かと思えます。

それから、海外インターンシップもございます。フランスのリール短大等に行っている学生もおりますけれども、もう一つはハノイの日系の企業に過去に1カ月ほどインターンシップに行っている学生もおります。

高専そのものが本科までは中堅技術者の育成ということが大きな柱でございますので、専攻科においてもそれを更に伸ばして、実践教育が重要となります。それをどこの授業の中で行っ

ているかと申しますと、科目の中に「創造工学演習」というものを専攻科の1年、2年生に設けてございます。

これは、例えば生産系ですと、サッカーロボットの設計・製作を行います。電気系ですと、機械と電子回路設計、これを実際の課題に基づいて、機械に基づいた電子回路を設計します。環境の方ですと、例えば秋田市に新交通システムを導入する場合に、どういう課題があるのか、そうした場合どういう交通システムがいいのかというのを実際に課題を抽出し検討してもらいます。化学系ですと、目的とした高分子はどのように設計するかというものでございます。その設計経路をもう1回見直して、組み立ててもらいます。ある意味、現実に近い形のテーマを設定して取り組んでおります。

次に入試の状況でございますが、これは志願倍率でございます。生産システム工学専攻ですと、およそ2倍強、2倍から2.75倍でございます。環境システム工学専攻は平成27年に定員を割りました0.63倍から1.75倍でございます。全体ですと2倍近い、1.63倍から2倍の志願倍率になっております。

機関別認証評価における高専の評価基準の中に明記されておりますが、定員に対して大幅に超過、不足をしていないかチェック項目に上がっております。平成30年の例を示しますと、現在大学編入を希望して専攻科の進学を取り止める学生がおります。生産システム工学専攻ですと、実際入学予定の学生の定員に対する比率というのは、1.6でございます。今年度の場合、環境システム工学専攻ですと0.75でございます。全体ですと1.19ですから、志願倍率をおおよそ2倍近く確保して、定員に対する比率1.1を確保しているという状況でございます。

専攻科をどんどん受験して欲しいというのが、私どもの一番の目的でございますので、平成30年度入学者の入試より、TOEICのスコアが500点以上であれば英語の受験を免除しています。これは、700点で100点満点に換算しています。

それから、専門試験の選択科目数を減らしております。12科目の中から3科目を選んで回答してもらう方式にして、集中して専攻科試験に臨めるようにということを今年度から始めております。

もう一つ学士取得率、進学、就職の状況でございますが、学習総まとめ科目の導入で、外部機関で学力試験を受けなくても、所定の申請をして通れば学士の学位が取得できるということを2ヶ年行っております。いずれも、100%学士取得は達成しております。

それから進学、就職率は、学生の絶対数が少ないものですから、統計数値が非常にばらつきます。概ね、4割以下が進学、6割以上が就職という状況です。

企業の求人倍率でございますが、これも学生数が少ないものですから、28倍から341倍と数字では表しにくいものかと思えます。県内就職率も、学生数の関係で非常にばらついております。

実際の進学の状況ですが、スライドの赤字が今年の就職先でございます。これは、過去5年間の就職状況をあいうえお順にすべて羅列したものでございます。生産システム工学専攻の進学、就職は、このスライドに示した状況でございます。環境システム工学専攻の方では、今年は大学院は北海道大学と千葉大学に2人決定しております。あとは、ニプロファーマの大館工場、五洋建設に内定しております。

次に高専の外部機関による評価でございますが、機関別認証評価ということで、高等教育機関としての教育の遂行能力が専攻科も含めて審査される訳ですけれど、平成27年3月に評価基準を満足という評価をいただいております。

2つ目のJABEE審査でございますけれども、JABEEすなわち日本技術者教育認定機構の審

査は、平成 27 年 3 月に審査基準満足という評価をいただいております。これにつきましては、今年度から継続の審査を本校としては取り止めさせていただいております。と申しますのは、この JABEE での教育方針、教育の進め方をすべて先ほどご説明いたしました学科改組の方に組み入れて継続して行っております。それから、JABEE で取得できる資格である技術士の一次試験及び二次試験の研修会を昨年度から新たに行い今年度も継続しております。

3 目目でございますが、認定専攻科というのは機関別認証評価の専攻科版と考えていただいて結構ですが、7 年に 1 回審査がありまして、平成 23 年に合格をいただいております。

4 目目でございますが、これが新しくできた特例適用認定ということで、申請して通ればそれで学士の称号が与えられるということで、平成 26 年 5 月に申請が認められております。今まで認定専攻科は 7 年に 1 回、特例適用認定は 5 年に 1 回審査を受けることになっておりましたけれども、来年度から 2 つまとめて特例適用専攻科ということで 5 年に 1 回審査を受けることになります。主には先生方の資格審査が非常に重要なウェイトを占めてまいります。先生方の教育それから研究実績がここで審査されることになります。

それから最後、本日審議をお願いしております運営協議会でございます。

次に、専攻科の課題でございますが、受験生の確保と質保証という点で、数は少ないですけれども、やはり途中でドロップアウトする学生がおります。その原因は、学力的についていけないということと、あまり目的意識のないまま専攻科に進んできたという点があげられます。そのため、入る前にしっかり指導してあげる必要があることを肝に銘じております。

2 目目ですが、この通りグローバル化が進んでおりますけれども、やはり学生にもう少し留学先の大学等も含めて選択肢を増やしてあげたいということで、今いろいろと新たな提携先ということで調査を進めているところでございます。

3 目目でございますが、専攻科の再編ということで本科の方も 1 学科複数コース制を導入しておりますので、新たにそれに合わせて専攻科の方も複合教育、それから専門性を高める上で、1 専攻複数コース制の導入を検討して参りたいと考えてございます。

4 目目でございますが、適用認定ということで、教員の資格審査が 5 年に 1 回非常に厳しく行われる訳ですけれども、そのためには全校的に研究環境をある程度整備していくことも必要かなと考えております。

最後ですが、高専と大学の共同教育課程の構築が新たに検討されております。専攻科は今まで高専の専攻科のみで教育してきた訳でございますけれども、高専では対応不可能な分野を大学の方から教授いただくことと、高専の方からも専攻科生を教授するというものでございます。学位の方は、大学の方から学士の学位を授与するというもので、このような新しい動きが出てきております。

これを今、北海道大学や九州大学、それに技術科学大学が一生懸命やっております、平成 31 年 4 月の運用を目指しているというような情報もいただいております。このため、今後専攻科が特例適用認定という格好を継続しつつ、新たにこういった流れにどのように対応していくかというようなことが課題として出てきております。

長くなりましたが、以上で説明を終わらせていただきます。

○意見交換・質疑応答

大石議長：ありがとうございます。それではちょっと時間が延びてしまいましたが、これまでの議事の 1 番、2 番、3 番に対しまして、ご質問、ご意見等ございましたら、ご発言の程お

願いいたします。

佐川委員：予算に関連してでありますけれども、運営費交付金が600万円減ったという話でありますが、これは減った要因というのはどういったことなのかということと、逆にプラスに転じさせる方法というのがあるのですか。

藤原事務部長：事務部長の藤原でございます。私の方からご説明いたします。運営費交付金につきまして、まず高専は全国51の国立高専が独立行政法人ということで、平成16年度に独立行政法人化になっております。独立行政法人になりますと率がかかりまして、毎年度運営費交付金を1%もしくは内容によっては3%削っていくという仕組みが必ず導入されております。そのためにどうしても減っていくというのがございます。

予算の所で、ちょっと補足しておきますけれども、実は先ほど出ましたとおり、全国の高専を一つに取りまとめておりますので、ここの支出、決算額、あとそれに見合った収入の額には、常勤の教職員の人件費が含まれておりません。こちらは、機構本部の方で計上しておりますので含まれていないということがございます。

その中で機構本部の方で、人件費というのはなかなか削れないと言いましょいか、削減しない限りは減っていかない方向になりますので、機構本部の方でもその全体にかかっている縮減率をカバーしつつ、各学校には残分と言うと変ですけども、そういったものを配分しております。全体的に言いますと全体の予算が国の方、税金が運営費交付金としてくる部分の大元が減っているということです。

先ほど増やす方法はないのかということがございましたけれども、スライドの6ページに平成29年度の収入予算の数字の方で、備考のところに書いてありますが、文部科学省の方も全体が減っていく運営費交付金の減の部分はやむを得ないとしましても、このように本校もそうですが、学科改組というようなことで新しい仕組みを作っていくという特色を出しているところには新たな予算を要求し、それを付けていただいているということでございますので、何もしないとどんどん減り、新しい改組等をするとこういう形で臨時的経費があるので、またこういうものを組み込みながら学校を運営していくという形が必要となってきております。以上でございます。

佐川委員：ありがとうございました。次々に新しい提案、仕組みというのを構築していかないとなかなかこの先安定的に確保することはできないということですか。

COC+というのですか、地元の就職率という話がありましたが、県内の他の大学に比べると極端に低いような気がするのですが、この要因というのはどういったものでしょうか。

米本校長：確かに例えば秋田大学に比べて、本校は地元定着率が低いです。これはどういうことかと言いますと、秋田大学の教育関係の学部は、もともと地元の先生になるというのが主たる目的である学生が多いということです。秋田大学の場合にはそういう学部があるということでもともとかなり多いということでございます。

本校の場合には元来、工業ということで出口が決まるものですから、その部分に関しまして、必ずしも秋田県の中に工業がない訳ではないですけど、大手の会社がない。本校の学生は大会社を志望する比率が高いということで、結果として少なくなっているというのが現状でござ

います。

大石議長：他にございますでしょうか。

村岡委員：秋田大学の理工学部も同様でありまして、だいたい県内就職率は10%ぐらいです。高専さんより、ちょっといいぐらいです。

平成28年度はかなり伸びたというのは、これは何か特殊な要因があるのでしょうか。

野坂副校長：もともと母数が小さいものですから、希望する学生が少し増えるとパーセントとしてはグッと上がります。確かに人数が増えたことも事実です。これは例えば就職指導といいますか、担当の先生が県内企業をある程度よく知っていて、「こういう良い会社もあるよ」ということにより、少し増やすことができたと考えております。

村岡委員：わかりました。意欲的な学科改組と取り組みをなされていて、非常に感動しておりますが、先ほど運営費交付金の実質減額ということで、改組するなり良い取り組みをすると予算がつくという訳ですが、国立大学ではその取り組みが非常によくて継続性があるという場合には基幹経費に変えられるという制度がありますが、高専機構の方はそういうのがあるのですか。

米本校長：私の方から回答いたします。先ほど学科改組に関わる予算が配分されたというのがあるのですけれども、これはもちろん一度きりの配分です。

実はその他に先ほどの追加、むしろ先ほどの補足になるのですけれども、高専4.0イニシアティブという、いわゆる大学で言うところのGPみたいなものなのですけれども、そういう特別の取り組みを出してもらって、その中で評価されるのが今年度から始まっております。実は残念ながら本校は申請して採択されなかったという状況がございます。

今、機構本部というか、文科省ですけれども、これは採択されたところに関しては多分2年、3年という形で予算を付けると。その他に今聞いている話では、また今年度新規の募集もするというような話もあったのですけれども、今のところはまだきておりません。

多分、改組とは別にそういうもので、どんどん新しいものを文科省あるいは機構本部では考えてくれているのではないかなと。実はそういうことを考えながら、私ども、先ほど安東教授がお話したのですけれども、グローバルという意味で、英語教育を一生懸命やりたいということでございます。今回昨年度の申請では採択にならなかったのですけれども、これからも引き続いて募集があれば更に強化して申請したいということを考えている状況です。以上です。

菅原委員：私、インスペックの菅原と申します。ここの卒業生の進路のことですが、ちょっとピントが外れるかもしれませんが、うちの会社に今高専の新卒は1名しかいないのですけれども、中途採用を含めると10名いまして、全社員の実数は20%です。それを間近に見ているものですから、実際転職して秋田に戻ってきている卒業生はかなりいるのではないかと思います。その辺の何かデータ的な情報は高専の方ではお持ちでしょうか。

野坂副校長：残念ながら、正確な戻ってきた数は把握できておりません。

米本校長：実は、いわゆるCOC+の一つの事業でAターン促進というのがありまして、いわゆるこれは新卒の卒業生を県内定着だけではなく、既卒者の関東とか県外にいる人を秋田に迎え入れようということです。

これは実は高専だけではなくて、秋田県そのものが一生懸命やってくださっている事業であります。そこに我々の方も加わってやりましょうということでやっております。

ただ、Aターンの具体的なデータについては、私どもは把握しておりません。

菅原委員：COC+の成果の一つにはなるのでしょうか。

野坂副校長：成果と言いますか、本校がそういうAターン希望者に関して直接斡旋することとはできません。本校ができるのはあくまで情報提供です。県内企業といろいろコンタクトを取り、アンケート調査もやらせていただいております。県内企業にどれくらいAターン採用を受け入れてもらえますかとか、希望がありますかという情報を集めて、高専卒の方が中心ですけれども、それを情報発信してそこで戻りたいという方がいれば、結ぶという形になります。

石井委員：大森建設の石井と申します。質問が何点かありまして、まず一つは総務に関する事項の中の年間行事の中で、テストの期間ですけれども、前期中間と前期末、それから後期中間、後期末とありますけれども、この前期中間と前期末の間が1カ月しかないのも、もうちょっとばらつかせて均等な割り振りみたいなものはできないものなのでしょうかということです。

それから地（知）の拠点大学の件で、地域教育プログラムの認定制度と書かれておりますが、具体的にはどのような認定制度になっているのかということです。

創造システム工学科ということで、非常に素晴らしい取り組みであるなとは考えたのですが、資格を取得する要件ですね、これに対して、不利益にはならないようにしっかりと担保していただいていることと関連してJABEEをお止めになって、要は技術士の1次試験が免除になるものですから、そのインセンティブがうちにも魔の1次試験の境目が何人も入社しているものですからその辺の問題があります。

それから私もこの年になって、風力発電の開発やらなんかで、海外と取引が非常に増えて、英語も少しやれば良かったなと思って、この高専の英語に力をいれる取り組みについては非常に素晴らしいことだなと考えておりますので、是非充実させていっていただきたいなと考えております。以上です。

米本校長：3つほど質問がありますが、私とその質問の交通整理係をさせていただきたいと思います。まずテスト期間については安東先生に回答をお願いします。

安東副校長：中間の試験に関しましては、前期の半期です、半期で15回の授業がある内の8回目に試験をしているという状況です。この日にちでみると妙に前半の方が多いように見えますけれども、実はゴールデンウィークが入ったりして、授業のペースでいきますとちょうど8回目に試験、前期の最初に7回やって試験、終ってまた7回やると、そのちょうど真ん中の辺りに試験が入っているということでございます。これは後期も同じ状況でございます。

米本校長：確実に半分ですね。

安東副校長：半分のところにちょうど入っています。

米本校長：まずそれはよろしいですか。

石井委員：確実に期間ではなくて、授業の回数で入っているということであれば7月から11月の間は非常に授業の回数が少ないということですか。

安東副校長：夏休みが入りまして、そのようになっております。

石井委員：夏休みが入るので、授業の期間が少なくなってしまうということですね。わかりました。

米本校長：次に地域教育については、野坂先生から回答をお願いします。

野坂副校長：平成30年度までは、秋田大学と秋田県立大学と本校の3者それぞれの機関で認定制度を作るという、それぞれ別の認定制度で行うという計画でございます。

平成31年度からは、これを共通の認定制度として構築していくという計画になっております。本校としては地域教育プログラムという認定制度を作り、この要件を満たせば今年の卒業生から該当し、それを認定していくという予定になっております。

ただこれも非常に心苦しいというか、残念なところ、本校の中でこの地域教育プログラムを履修して認定されたら就職する時どういうメリットがあるのかと言われると、そこが非常に弱いところではあります。

石井委員：その部分が聞きたかったところでした。認定制度によって地域定着という、この因果関係は今のところないということでしょうか。

野坂副校長：COC+授業や講演会等を通して、秋田県の魅力や県内企業の魅力を学生に伝えていくというのが私どもの考えている一番のポイントでございます。では、その資格を取ったから、認定してもらったから、どうだこうだという所までは、まだできていないというのが現状です。

石井委員：残念です。

米本校長：次が創造システム工学科1学科になって、資格要件等で不利なことはないのかということと、JABEEが廃止になったことによる不都合がないのかということがご質問だと思います。

最初に資格要件に関しまして、桜田先生からお願いします。

桜田専攻科長：従来の4学科体制の場合に本校を卒業して、それだけでもらえる資格というのは測量士補だけでした。もちろんその後会社に入って、一定期間の実務経験が求められます。それに関しましては、カリキュラムがどのような内容の授業をしているのかということも踏ま

えて順次申請をして、資格を管轄する協会等から了解をもらうという形をとっております。

もちろん、現状ですぐに従来と同じ資格の形をもらえるところには既に出してありますけれども、まだ1年生しか経過しておりませんので、それがその学年に到達次第に順次申請して、従来と同じ資格は最低限カバーできるように対応するつもりでおります。

石井委員：よろしくお願いします。資格をもらえない、もらえるかということで採用する企業は見ていると思いますので、よろしくお願いいたしますと思います。

桜田専攻科長：実は土木の方の測量士補でございますけれども、今までも学科改組を進めてまいりましたけれども、その都度、測量士補や建築士の資格を所管する外部機関にカリキュラムを全部提出してチェックをいただいております。その上で当初の名称等が変わっても、個別に別途審査を受けて承認をいただいているという状態でございます。

米本校長：今、測量士補に関しましては、名称が変わってもしっかり承認されていることでよろしいでしょうか。

最後に JABEE の廃止に関しまして、私の方から少し補足させていただきます。

いろいろ議論がありまして、結論として廃止ということになりました。まず、廃止したことによって何が不利益になるかということで、学生に技術士補の資格を与える意義がどうかということでした。技術士補を今まで与えていてそれが具体的に学生にとってどれぐらいメリットになっていたのかということ色々と調べまして、あまりないのではという結果になりました。実際に技術士になるためにはもちろん技術士補ではどうしようもなく、その後の本格的な技術士の試験を受けないといけない。その技術士試験を受ける時にその前の技術士補の資格を高専が与えていなければ受けられないですけれども、それそのものは先ほど石井さんもおっしゃいましたが、みなさん大学卒の人であればちょっと勉強すれば技術士補の資格はとれるのではないかというのが一つにありました。

それからもう一つ、これは学校内の問題ですけれども、教員サイドからみて JABEE 認証の準備がものすごく大変です。これは、すなわち学校サイドでは不評でございます。そういうことで高専の方も色々な高専が一抜けた二抜けたということで、そうであればうちの方もということで廃止になりました。その代わり技術士になるための特別な講座を用意しようということで、桜田先生が一生懸命やってくださいまして、昨年から廃止と同時に学生向けに技術士の試験を将来受けるための特別講座を用意するというを行っております。

石井委員：ありがとうございます。よくわかりました。秋大はまだあると思います。ただ東大とか、京大になるとないです。

村岡委員：名前が挙がりましてので、補足させていただきます。私どもも教員からの強い反対がございましたが、教育プログラム点検の良い機会として継続しています。

また、機関評価のエビデンスとしても役立っております。

JABEE はワシントンアコードに加盟しておりますので、留学生の確保にも効果があると思っております。

大石議長：うちは辞めました。JABEE は、長岡技科大は建設以外は全部やめました。

教員の負担が大きくて、やはり認証評価の項目に対して JABEE は 3 倍ぐらい量が多くて。私、評価担当なので、自己点検、外部評価と 2 つ受審して最後に認証評価を受けるという 3 段階にすることで、JABEE はほとんどの系は辞めました。ですので、私は秋田高専さんのやっているのは別にそんなに悪くない、いいチョイスだなと思います。

あと、私の方からコメントですが、うちの大学は今年度からホームカミングデーというのを設けて、OBの方を呼ぶようにしたのですが、高専というのはOBの方はかなり自分の子どもを入れたがるので、もしオープンキャンパスの時にホームカミングデーみたいなものを作っていただくと、少しは興味を持たれる方が多いのかなと思ったのですけど。

あとは、間接経費がございますが、あれはうちの大学ですとだいたい 10% の内の半分が本部で、残り 5 % の半分が学科で、半分が教員ですけれど、ここはどうなっているのでしょうか。

米本校長：本校は、3 分の 2 を学校で、3 分の 1 を先生方に配分しております。

大石議長：いいですね。

赤上委員：産業技術センターの赤上でございます。企業との共同研究の件数をお知らせいただけないでしょうか。

米本校長：これはこの後で宮脇先生の方から、研究のところで説明があると思います。

赤上委員：わかりました。というのは、正に C O C + に繋がっていくと思うのですがけれども、県内企業と共同研究をしてその研究内容によっては、要は企業のエンジニアとそれで技術、スキルを深めて行って、その会社に入っていくという動きが非常に現実的なのではないかなと思ひまして、そういった件数が増えていくのであれば素晴らしいなあと思っているところでございます。それでは後ほどまたお話をさせていただきます。

米本校長：実は C O C + で県内企業への学生の定着というのは、正に今おっしゃったことは私も実はそれしかないと思っております。無理やり学生に行けと言っても無理な話でございます。学生が会社の中身を見て、それで本校の教員が会社の人とやっているのをみて、これ面白そうだなと思って行ってもらうのが一番いいと思っております。そのために色々な仕組みを作ろうということでやっております。後で説明がありますので。

赤上委員：楽しみにしておりますので、よろしくお願いします。

石井委員：私もここの卒業生ですがけれども、私の頃の卒業研究というのは、それはそれは過酷で、本当にかなりやらされました。実験から何かからかなりやらされた記憶があるのですが、最近のカリキュラムだと週に 2 時間ずつ 2 回ぐらい出ればという、サラリーマン化したなあと印象を持っております。今のところと関連してくると思うのですがけれども、その辺も充実していただければなとこちらの意見に関連して、ちょっと思った次第でございます。

安東副校長：今の卒業研究は9単位ございまして、言ってみれば1週間に9時間授業があるというのが実際のところです。昔は11単位、私もこの卒業生ですけども、11単位でした。だから少しは確かに減っておりますけれども、ものすごい量の減り方ではないなという感じはします。

あと私も正直な話、夜も寝ないで絞られた口でございまして、今の学生は夕方6時過ぎまして研究室に行きますと居ないということがよくありまして、泊まり込みでやるということは、ほぼないのが多いかなという感じがしております。時代なのかもしれませんけれども。

だから昔徹夜してやったという我々等から見ると、随分確かにサラリーマン化したかなという感じはあるかもしれませんけれども、昔はやり過ぎていたのかなあという気もしております。

佐藤委員：中学校から参加させていただいておりますので、年間行事を見て、オープンキャンパスが8月5日で、ここは中学校だと運動部の東北大会が一番盛りの時期でございます。公立の高校では7月の末だとか、あるいは8月の末、9月の頭に実施しています。中学校から参加者が多いのは8月の末、9月の頭でございます。

というのは、多くの中学校では夏休みに入って3者面談を実施します。そこで進路の1回目の話などが出ますので、そういう話を受けて、8月の末から9月の頭に行く高校さんは結構参加者が多いのかなと思います。

ただ高専さんも例年入試の定員の数は満たしていて、オープンキャンパスの参加者も200名は超えているようですけれども、県立の秋田工業さんはもう少し参加者が多いのかなあという感じがしますので、もし可能であれば時期の見直しなどいかなものかなと思います。

米本校長：私から、回答になるかどうかはわかりませんが、運動部の東北大会があるという認識が実はありませんでした。今、初めて伺ったところでありまして、もう1回検討させていただきたいと思います。ただ1つ中学校の方で三者面談があるとむしろそれよりも前に来ていただいた方がいいのかなと思うのですが。

佐藤委員：そのため、7月の末ぐらいに実施している県立高校さんもあります。

米本校長：ということは8月の始めよりは7月の末だったらもっと良いのではないかとということですね。なるほど、わかりました。

ちょうど本校の夏休みに入って直ぐに実施していたのですが、1週間前だと学生との兼ね合いがあるのですけど、安東先生、いかがでしょうか。

安東副校長：本校の試験とがっちり重なっております。

米本校長：試験期間でしたか。今の東北大会という情報に関しましては我々把握しておりませんでしたので、そこはおっしゃるように、なるべく多くの生徒さんに来ていただきたいので、もう一度これも検討したいと思います。

佐藤委員：ありがとうございます。

大石議長：大分時間が過ぎてしまいましたが、ここで休憩いいでしょうか。10分休憩で次は4時20分からということでお願いします。

＜ 休 憩 ＞

大石議長：それでは全員お揃いなので、後半の部を開始させていただきたいと思います。議事にいきますと4番目の「学生指導に関する事項」で、佐藤学生主事よりご説明をよろしく願います。

Ⅳ 学生指導に関する事項（スライドNo. 55～No. 70で説明）

佐藤学生主事：それでは学生の日々の生活に関するところで、かいつまんで説明させていただきます。まずこの写真でございます。これは毎年4月に1回きりですが、学生がどういう活動をしたかという「学生だより」というのを毎年1回発行しております。これは今年の4月の表紙を飾りましたバスケットボール女子、創部2年目の女子バスケットボール部が東北地区大会で勝ち、全国大会に出場したこういう元気のある写真を学生だよりに載せました。

先ほど教務主事から少しお話がありましたが、うちの学生数でございますけれども、専攻科まで入れますと858名です、その内女子が174名の約2割でございます。

年齢は中学校卒業後ですので、本科で言いますと16歳から20歳まで、それから専攻科を入れますと22歳までという非常に多感な頃の学生をお預かりいたしまして、教育とあるいはここに書いてあります厚生補導を行いながら、豊かな学生生活を送ってもらい、人材育成をしっかりとしていくというのが私どもの役目な訳でございます。

ここに書きました私どもが今やっている学生スタッフという学生主事以下の全員を足しますと8名になる訳ですけれども、この8名が学生委員会等を通しまして、クラブ指導、いじめ防止、学生相談室等を通してながら本科学生と専攻科学生の学生生活の面倒を見ているということになります。

その他に高専体育大会、低学年生もおりますので交通安全教室を開催しての啓発活動や各種の啓発講演会を実施しております。これは毎年秋田大学医学部の先生においでいただきまして、低学年生から教職員を含めて指導をしながら全体で啓発していくという活動をしております。

事故防止への取り組みということで、最初にこういう数字を出すのはよろしくないかと思うのですが、4つございます。

まず、昨年度と今年度の事故届の件数でございます。事故届というのは何か学生が怪我をしたり、事故に遭ったりした場合に、事務の方に事故届を提出します。今年は12月1日現在で29件でございます。

例えば校内において体育の授業中怪我をしたとか、クラブの大会中に骨折した、あるいは登下校時に自転車で転んでしまった、休日中にバイク事故を起こした、こういったものが数としてあがってきております。これが、2や4の数字だったらいいのかという訳でもないですが、やはり最終的に0にしなければならぬ数字だとは思っております。

ただ平成28年、平成29年の数字だけから申しますと、先ほどの全校生徒が900名近いということを考えますと、だいたい1%以下の事故ということになります。起きる事故の確率から申せば、非常に小さいということになる訳ですけれども、ほとんどが不注意によるものでございます。ただし、今年度と昨年度で、自殺者あるいはいじめが原因などによる大きな犯罪事故、

こういった報告は今のところございません。しかしながら、この数字から言うと、まだまだ私どもの努力が足りないということになる訳でございます。

具体的に何を行ってきたかということですが、最初に記載しております今年4月から始めました全自転車通学学生へ個人賠償責任保険の加入を義務付けしたということです。これは校長の発案でございますけれども、事務の方とかに色々ご協力いただきまして、全国に先駆けて実施いたしました。これは、大学等ではありますが高専ではなかったということで、本校の学生の内、8割強が自転車通学でございますので、これをしたから事故防止という訳ではないですが、安全、安心という意味でこういう取り組みを先駆けてやっております。

金額だけ言いますと、最初5,6千円から交渉していきまして、1,300円まで下がり全員加入させるという制度を作りました。ここに実物シールを持参してきましたが、番号は通し番号で600何番までございます。

それから通学指導を強化いたしました。今まで登校時だけだったものを下校時も実施することにしました。近隣の方々から苦情が毎年ございますので、なんとか会話をしながらご理解いただこうという取り組みもやっております。今年の前期は、4月21日から7月12日までと期間を決めて1週間に何回か実施しました。先ほど少しありましたが、試験期間中がこの間に入りますので、あまり刺激しないようにということで、その辺りは指導を避けながら夏休みに入るまで実施しております。どういうことをやっているかと言いますと、サンダルを履いて学校に来ていないか、2人乗りをしていないか等ということでございます。99%程の学生は真面目に来ておりますので、残りの1%程の学生を指導しているという状況でございます。

これは高専の周囲5km程の地図でございますけれども、真ん中がぽっかり空いているのが高専の敷地でございます。今まで決まった場所しか実施していなかったものを今年変え、丸印のついている箇所の近隣の方の苦情を聞こうということで行いました。その結果、ほとんど苦情はありませんでした。高専に対しては比較的近隣の方は良いイメージを持っていたいなと感じました。

それから他の周りの行政機関だとか、あるいはここちょっと書き漏らしてしまったのですが、秋田大学の先生方との協力も得ながら、学生の指導を行わせていただいております。

特にこれは昨年ですが、近隣の秋田臨港警察署と「秋田工業高等専門学校警察連絡制度」に関する協定を結びました。何か事が起きる前の情報交換や情報共有、あるいはもし万が一、何か起こった場合に協力していただくという体制を整える取り組み等々でございます。

今年、警察署長と学生会長とで、自転車の安全利用等についての啓発活動も一生懸命やろうということで、地域自転車安全利用モデル校の指定を受けました。

学生の健康維持ということですが、今年度、学生相談室の組織を変更いたしました。室長に副学生主事を充て、従来以上に学生に寄り添っていく体制にいたしました。学生相談室の室員は、副教務主事、それから副寮務主事という主事下にいる先生達に就いていただき、より連携しながら対応していくということにさせていただきました。

それから学生は学生同士の悩みがあるということで、先ほど教務主事からお話がありました、TA（ティーディング・アシスタント）、SA（スチューデント・アドバイザー）、こういう制度を導入しながら、学生の相談にのってこういう対応をさせていただいております。学生の心身健康調査というのを毎年実施しております。「こころと体の健康調査」を年2回実施しております。これは機構の方から制度として実施することとなっております。

今年は7月の夏休みに入る前に1回、2回目は10月に実施いたしました。ほぼ本科の学生全

員が回答しております。

ここで大事なのは調査をいたしました結果、ここに希死念慮判定とございます。希死念慮というのは、例えばもう死にたいという気持ちを持つこととございます。そういったものは調査の段階で分かるようになっております。面談の要否は学生相談室に精神科の専門医と心理療法師の専門家が2人おまして、その先生方と一緒に配慮レベルを検討して、必要のある学生は面談をしていくということになります。

数といたしましては、だいたい4～5%の学生が何らかの要因を持っているということで、長い期間をかけてカウンセリングしていくというものでございます。

それから「いじめアンケート調査」は10月に実施いたしました。これもだいたい全員が回答しますが、このアンケートに賛同してくれる学生だけ回答してくださいという制度になっております。

例えば学生が何かしらのいじめを受けた、見た、した、あるいは軽く叩かれた、足を蹴られた、SNSで言われ続けた、こういう項目は国のいじめ防止推進法の項目に準拠した形ですが、こういった項目を設定しまして、これに何か引っかかった学生は今年は20名ぐらいおりました。その学生に丁寧にヒアリングをしまして、チェックしております。今までのところ、ヒアリングは3分の2ほど終わりましたけれども、昔見たとか、そういう話でございますので、高専での云々ということは今のところないということは確認しております。

それから、「いじめ防止基本方針」でございますが、資料は一部抜粋したものでございます。これは、ホームページ上に掲載しております。いじめ防止・対応委員会で対応しますが、校長が委員長でございます。私が副委員長ということで、こういった委員会を組織しながらきちんと対応していくという体制になっております。

クラブ活動でございますが、本校では体育系、文化系とコンテスト系を合わせますと全部で34団体でございます。東北6県の中でもかなり多い団体数を抱えている高専でございます。

ここに昨年と今年の高専体育大会の東北地区大会というのがありますが、東北地区大会に優勝すると全国大会に行けるというものでございます。それをロボコン等のコンテスト系も含めてまとめてみました。

平成28年度は秋田が主管で東北地区6県全部を担当するというのもあったせいか、比較的多ございました。

今年度は初めて各県での分散開催となり、各県が2つずつ担当する制度に変わりましたが、それでも結構頑張った結果になっております。

特に飛行ロボットコンテストは毎年かなり頑張っており、昨年はユニークデザイン部門全国第1位、飛行競技でも第2位という素晴らしい結果を残しております。今年は地域をデザインする全国高専デザインコンペティション2017で、全国最優秀賞、文部科学大臣賞を受賞して、一生懸命頑張っているということとございます。

これが昨年飛行ロボットコンテストで1位になったグループの写真でございます。

最後に本校学生の表彰および処罰状況ということで少し厳しいお話もあります。まず、表彰の方でございます。昨年度新たに創設した秋田高専賞でございます。これは、卒業する5年生だけを対象にしたもので、非常に卓越した成績優秀者の授業料を免除するというものでございます。この表彰は前・後期でそれぞれ行い、2名の学生を表彰いたしました。

それから学年優秀賞でございます。これも昨年新しく創設したものでございます。学年ごとで成績優秀だった者、その年に懲戒処分がなかった者という条件がございます。例えば、昨年

度ちょっと悪いこととして懲戒処分の者でも、今年うんと頑張れば学年優秀賞がありますという、そういう賞を創設しました。

今年も表彰予定でございますが、20名というのは4学科×5学年ということでございます。昨年は70名以上の者が何らかの形で表彰されております。

こちらが4月に発行いたしました学校だよりの表紙を開きまして1枚目にこういう形で受賞者一覧を掲載しております。5年生の受賞者一覧は早めに決まるものですから、この4月に間に合うのですが、4年生以下は4月の前の週にしか決まりませんので、1年遅れで来年の4月の学校だよりに掲載することになります。こういう形できっちり表彰しております。

最後に学生の処分状況でございます。昨年、一部懲戒に関する申し合わせを改正いたしました。何らかの違反行為により懲戒の処分を以前受けたものは2回目の懲戒の場合にはすべて無期停学といたしました。無期停学というのは4日以上停学の処分でございます。例えば、説諭がございましたけれども、親御様を呼んで嚴重注意をするということになりますけれども、そういう処分で2回目を受けると無期停学という処分に改正させていただきました。

これは昨年度と今年度の処分を受けた学生でございますけれども、昨年度は6名で寮規則違反者が多くなっております。今年度は、数は同じくらいですが、試験時の不正行為が少し多く、あとは低学年のつきまとい行為、こういったものでございました。そのため、低学年の教育もこれからもっとしっかり対応していかなければいけないと思っております。

私からは以上でございます。

大石議長：佐藤先生、ありがとうございました。時間がかなりオーバーしているので、10分厳守でお願いします。今20分でした。5番目、「寮の運営に関する事項」で、石塚寮務主事よりご説明の程、よろしくお願いします。

V 寮の運営に関する事項（スライドNo. 71～No. 79で説明）

石塚寮務主事：寮務主事の石塚政吾と申します。私、人文科学系に所属しております。私の方からは寮の運営と寮生の状況について簡単にご説明したいと思います。

最初の画面ですけれども、寮の外観です。学生寮、背景に青空が映っておりますけれども、別名青雲寮と呼ばれております。

寮の運営方針でありますけれども、寄宿舍規則というのがございまして、その第2条、目的のところに次のように書かれてあります。「学生寮は、学生の修学及び規律ある共同生活の場としての教育並びに厚生施設とする。」ということで、ポイントは修学、それから教育、厚生、この3つを達成することを目的とした施設ということでございます。

修学につきましては、寮生である前に本校の学生であるということを常々指導して、規則正しい生活に基づく、まずは学業成就こそが本務であるということを忘れないようにさせたいと思っております。

それから教育としましては、2つの教育ということを考えております。1つは教員による寮生、学生への教育。それからもう一つは7歳隔たりのある寮生、学生が存在しておりますので、寮生同士、相互の教育ということを働かせて、人間形成を図っていきたくて考えております。

厚生施設としましては、安全管理と食事の提供、健全な精神は健全な肉体に宿るということで、食事をきちんと取って、そしてきちんとした生活リズムでもって生活する。そして各種の行事を企画して、相互の親睦を図りながら、厚生施設としての機能を果たしていくというように考

えております。

そうした考えの元で、寮の運営体制ですけれども、まずは寮務スタッフというのが中心になって運営を行っています。寮務主事、副主事、主事補そして寮務係が現在常勤1名、再雇用1名の計2名の総勢5名です。

何か調査、協議が必要な時にはそのスタッフに、更に各系から選出されました寮務委員というものが加わった寮務委員会で審議・協議をしております。それから寮務主事、副主事、主事補の指導の下に寮生会を組織しております。寮生会の規約の中にございますように、自治と協和によって人間形成を助長していくという、こういう目的を持った組織として11名の役員を中心に活動しております。後ほどその活動についてもご紹介したいと思います。

それでは寮務の主な活動ですけれども、このような活動になっています。開閉寮式、長期休業に入る前と休業明け、年6回、寮務のスタッフによる講話によって気持ちの切り替えを行っています。

居室点検、閉寮する時に必ずするもので年5回、5月と11月には生活状況を把握するという事で、寮務スタッフ対応のもと、寮生会主導で行っております。

それから面談旬間、これも年2回、5月と11月に行っております。入寮して新しい年度が始まって1カ月、だいたい慣れてきたなという頃に1回、それから後期、11月から暖房が入りますけれども、その前に1回環境を整備しながら一緒に面談も行っております。最近は精神的に不安を抱える学生も多くなってきていますので、そういった学生への対応ということも考えての旬間を設定しております。寮務委員の先生方にもお手伝いいただいております。

次に、説明会は入寮生の確保ということで、年3回行っております。進学ガイダンスと進学説明会の際に合わせてと新規入寮生に対しての説明会を行っております。

安全衛生管理ということで、避難訓練は年2回行っております。また、保健と体育の方とも連携しまして、AEDの講習会、インフルエンザがこれから流行る季節になりますけれども、それに向けた手洗い講習会を行っております。これが実際にAEDの講習会を行っているところでございます。

また、保護者会を年1回行っております。今年は6月に実施しました。

共同学習会というのが、修学支援のために年2回、学期末の試験の前に行われております。

次に寮生の入寮状況について説明いたします。過去3年の入寮状況を示してあります。平成27年度157名、平成28年度が154名、今年度が151名、いずれも4月1日当初の入寮生の数であります。ほぼ150名前後で推移しております。全学生数が840名ぐらいですので、ほぼ全体の18%の学生が寮での修学をしております。

次に寮生の日ですが、規則正しい生活を送られるように、このように日課表を定めて生活を送っております。

安全サポート体制は、昼間は寮務係が寮の事務室に控えております。夜は教員が交代で宿直をして24時間体制でサポートできるようにしております。中でも特に力を入れているのは朝と夜の点呼で、まずはきちんと寮の中にいるかどうか、この確認は怠らないようにしております。今年度、欠食管理をシステム化しておりましたけれども、更に在寮についてもシステムで対応できるように新たな点呼システムを導入しました。これがその時の様子になります。

このように寮生が一人ひとりface to faceで宿直の先生のもとへ来て、体調に異常がないかどうかを自己申告します。そうすることで自立的な生活態度を管理することができます。この手元に持っているのがiPadで画面にこのように名前が載っていて在室、不在を確認できるように

なっております。これを使うことによって、1カ月毎の在寮状況についてデータを活用していくことができるようになっております。食事についてもこのように管理しております。

寮の経費としてかかるものは、こちらです。およそこのぐらいの額ということで、寮費については、灯油代、石油代、重油代は変動することがあり、時々見直しを図っております。

給食費につきましては、1日の食費は1,135円、22日分換算でこれぐらいの額になります。非常にリーズナブルだと思います。

最後に寮生会が主体になっている寮の主な行事をご紹介しますと思います。4月は新入生歓迎会、このように新入寮生を先輩たちが迎え入れる、一人ひとり自己紹介している所です。

5月、寮生たちも慣れて来た頃、少し朝起きるのがつらくなってくる頃ですが、早朝のサッカー大会でまた早起きを心掛けてもらおうとしております。

6月が最大のイベントの寮祭という行事が入ります。これは昨年から始めたそうめん流しをやっているところでございます。

留学生も積極的に参加しておりまして、一つブースを設けまして、今年はやりませんでしたけど、例年料理を作り提供しています。

後期になりますと、昨年度まで出来なかったなべっこ遠足を今年復活させました。生憎の雨天でしたが、天王グリーンランドでこのように楽しく親睦を深め合いました。

この後は卒業生を送り出す予餞会、それから冬季の運動不足解消ということで、スポーツ大会などを予定しております。

以上、早足で寮の運営と寮生の活動について紹介をしていきましたけれども、課題としましては施設設備がかなり老朽化しております。見た目の外観は非常に綺麗な感じに見えますけれども、そうした老朽化の中でどう生活の質を確保していくのかということでございます。それから寮務がかなり負担過剰になっておりますので、効率化をさらに促進していきたいということと、IT化を進めたいということでございます。先ほどお話にありました、グローバルエンジニア育成事業への準備を寮としても進めて行きたいと考えております。

以上で私の説明は終わります。

大石議長：石塚先生、ありがとうございました。最後は6番目になりますが、「研究・社会連携に関する事項」を宮脇副校長よりご説明をお願いいたします。

VI 研究・社会連携に関する事項（スライドNo. 80～No. 91で説明）

宮脇副校長：研究・社会連携に関する事項ということで、研究担当の宮脇和人がご報告いたします。よろしくお願いいたします。

地域共同テクノセンターの取り組みといたしまして、ここにあります大学、長岡技術科学大学、秋田大学などの大学、県、産業技術センター、地域企業、学術研究機関との連携を地域共同センターが行っております。具体的な活動についてご紹介いたします。最初に活動状況につきまして、(1)から(7)まで簡単にご紹介いたします。

(1) まず企画行事の継続的事業の開催といたしまして、①から④を実施しております。①に関しましては最先端技術講演会として、5年生向けに実施しております。②③に関しましては外部資金等の講習会ですので、教員向けでございます。④に関しましては技術研究会として、各地域の企業向けに実施しております。

(2) 県内外の連携事業の参画といたしまして、第1ブロック高等専門学校テクノセンター長

等会議に参加しました。この会議は高専といたしましては北海道、東北地区を第1ブロックとしておりますので、7高専が連携するセンター長会議です。

その他、秋田大学と共に、産学官共同研究拠点センター新技術説明会として、東京のJSTホールでの特許説明会等に参加しております。

(3) 本日は皆様にお配りしております『地域共同テクノセンター報15号』になりますけれども、毎年1回700部ほど作成しております。

(4) 知的財産権セミナーということで、これは主体が学生向けですが産学協力会の企業様にも聞いていただいております。

(5) コディネーターが県内企業を訪問しております。

(6) 産学連携の取り組みといたしましては、赤上産業技術センター所長にお出でいただいておりますが、秋田県産業技術センターとの共同研究の取り組みも行っております。

(7) 最後にあきた産学官連携フォーラムについてですが、先月秋田大学と秋田県立大学、この3つの機関で連携フォーラムを実施しております。

このような取り組みと共に、産学協力会、これについてもご紹介したいと思います。本校の産学協力会というのは、ここにも書いてありますように、地元の企業と高専との交流のパイプをもっと太くすることを目的に設立されております。

現在の会員企業といたしましては81社でございます。会長は本協議会にもご参加いただいております菅原雅史様でございます。今年度の会員企業は、12社ほど増加しております。

具体的な取り組みといたしましては、定期総会が5月末に行われておりまして、その他県北、県南でそれぞれの講演会を実施する、もしくは実施する予定になっております。県南の講演会は明日、由利工業株式会社で実施いたします。今年度から総会、講演会において、米本校長も参加して活発に活動しております。

引き続きまして、簡単に共同研究、受託研究について事例紹介させていただきます。

トピックスとして、ユニット研究室における共同研究促進事業を今年度から実施しております。体制といたしましては、ここにあります物質・材料研究機構、これはつくばにある研究所ですが、ここが中心となって本校にユニット研究室という研究の場を設置しております。連携としては、秋田県産業技術センター及び企業としては秋田化学工業となっております。この連携による研究の内容としてはこちらに簡単に紹介しておりますが、炭素繊維複合材料の耐摩耗、耐摩擦性能などを向上させる、そして、新素材の用途市場を拡大するために技術開発を行うということを今年度から実施しております。

次に共同研究の事例ですが、本校と秋田県産業技術センターとで次世代の半導体基板研磨システムに関する共同研究を実施しております。内容としてはSiCなどのパワー半導体向けの難加工性材料の高効率CMP技術の創出を目指しております。

その他、受託研究の事例といたしましては、下肢障害者のための自転車ユニットを用いた筋電計測に関する研究ということで、秋田県（あきた産学官連携未来創造研究事業）として実施しております。障がい者向けの普段使用している車いすに手軽に取り付けるFESサイクリングの開発を、企業様と秋田大学様と共同で研究し、今回は筋電計測を行いました。

次に科研費の申請の取り組みについて簡単にご紹介したいと思います。平成27、28、29、30年度と申請件数はかなり伸びております。その理由といたしましては、平成29年度から学内の研究費に関して、科研費に申請しないと研究費が半分になってしまうという仕組みを構築しました。これを米本校長が強いリーダーシップによって行った結果、このように100%を越すよ

うな申請率になっております。

ただ次に出てくるのが採択件数ですけれども、残念ながら、申請数は上がりましたが、申請数に対して採択件数は伸びておらず、今後検討する必要がある項目になっております。

こちらは、先ほどの外部資金に関しての金額ベースでの表になっております。平成 27, 28, 29 年度ということで上がっており、今年度は 11 月現在ですので、先ほどのユニット研究室分が加わると昨年度より多くなる予定です。

それで先ほど赤上所長からの質問に関しまして、残念ながら私の資料としてはこれしかありませんが、先ほどお配りいたしました地域共同テクノセンター報の 86 頁を見ていただきますと、平成 24 年度から平成 28 年度までの共同研究及び外部資金のもう少し詳しい表が出ていますので、そちらを参考にいただければと思います。

最後に、直面する課題と展望ということで、専攻科の特例認定をバネに先ほど専攻科長から研究に関しまして、5 年間で特例認定を受けなければいけない。5 年間で論文 2 報の研究実績が必要で、それを行うためにはグループ化によって研究業績を増強していく予定です。

科研費は、申請率はかなり高い割合を確保いたしました。今後は採択率の向上を目指します。なおかつ基盤 C の採択ノウハウは蓄積できたので、基盤 B への挑戦が今後の課題になってくると考えております。

科研費だけではなくその他の外部資金の獲得として、企業もしくは県との共同研究、受託研究にいかにして取り組んでいくかが今後の課題となっております。

以上です。

○意見交換・質疑応答

大石議長：どうもありがとうございました。それでは 4 番から 6 番までのご説明に対して、ご意見、コメント、ご質問でございますでしょうか。

佐川委員：研究に関してですが、私若い頃、編集現場にいた頃、秋田高専と言えば将棋の米長邦夫さんのお兄さんが先生でいらして、その方が数学的な手法を用いたプロ野球の日本シリーズの対戦チームの戦力分析をするだとか、あとは将棋の棋士の方々のいろんな戦術を分析されたとのことで、新聞紙上でも報じましたが、非常にユニークな研究をしているなというのが伝わってきました。

そういう意味からしますとただ今のご説明やシーズ集を拝見する限り、専門的な領域で企業とつながる分には確かに有効でしょうが、やはり社会、地域とつながるという点では、表現の部分でなかなかとっつきにくい部分もあります。これは情報発信がやや不足しているのではないかなという印象を持っております。新聞社も含めて、テレビ局もそれほど数居は高くないので、どんどんアピールした方がいいと思います。

うちもかつては大学担当という専門の記者がおりまして、秋田大学様をはじめとして、研究室をコツコツ回って歩いて、ユニークな研究や地域に役に立つ研究がないのかということを取材していた時期もありましたが、なかなか記者が悠長に一人専門分野を持つことが最近難しくなしまして、研究室を地道に回る機会は少なくなりました。

逆に大学あるいは高専の現場から、今こんなことをやっていますよというものがありましたら、どんどんアピールしていただきたいなと思います。こちらの方ではそれを排除することはありませんし、むしろ歓迎いたしますということをお伝えしたくて。

米本校長：わかりました。アドバイスをしっかりと実現の方向にしたいと思います。とにかく今の話でも、我々の方から、新聞、いわゆる報道機関の方に投げ込みでもなんでも出すということが必要だと思います。しっかり頑張っていきたいと思います。ご助言、ありがとうございます。

大石議長：秋田高専さんは定例記者会見の日というのは、決まっているのですか。

米本校長：ありません。

大石議長：うちは強制的に毎月1回決まっております。ただし、記事がないと1カ月スキップすることはあります。毎月は大変なので、例えば年2回と記者会見の日を決めると意外とうまくいくケースだと思います。

米本校長：実は私、2年前まで東北大学にいましたけれど、東北大学の工学部は、確かに広報が不足しているということで、広報委員会というのを作り、毎月必ず記者発表をすると決めました。そうすると今度は委員会から学科の方に発表ネタについて圧力がかかってくる訳です。圧力というか、「何かありませんか」、「ありませんか」という具合で。

そういうことで一生懸命やると自然にそこからまた出てくると思いますので、今私がどれだけ皆さんに圧力をかけられるか分かりませんが、本校にもそういう形でできればやっていきたいと思っております。ありがとうございます。

大石議長：他にございますでしょうか。

赤上委員：産業技術センターの赤上でございます。共同研究についてご回答いただきましてありがとうございます。科研費に非常に申請されているということであれば、シーズをお持ちの先生方がたくさんいらっしゃると思いますので、もう少し企業側にお伝えをして、一緒になって共同研究に取り組んでいただければ、額はちょっとわかりませんが、研究費に繋がっていきましようし、人との繋がりになっていくこともありますので、是非ともここを強化するというところをご検討していただければ、COC+にも自然と繋がっていくと思いますので、よろしくお願ひしたいなと考えております。

米本校長：我々もやっているつもりではおるのですけれども、こんなに十分やっていますよと言えるような状況でございませんで、引き続きもっと強化してやっていく必要があるかと思ひます。宮脇先生、よろしいですね。

宮脇副校長：はい。

大石議長：他にございますでしょうか。

村岡委員：秋田大学の村岡でございます。科研費申請率100%、校長先生のリーダーシップで実現されていること、見事で驚いております。基礎教養関連の先生方も含めて100%というこ

とですか。

宮脇副校長：一人で複数出す教員もおりますので、そのような割合となっております。

米本校長：現実問題として出していない教員は、非常に少ないです。

宮脇副校長：少ないですね。

村岡委員：素晴らしいです。

米本校長：理由は簡単です。出さなかったら、通常のいわゆる運営費交付金からの研究費配分を減らしますという、皆さん申請してくれます。

村岡委員：私どもも学部のカウンスルをやっております、米本先生にも学部運営委員としていろいろご助言をいただいているところです。また、産業技術センターから赤上所長にも学部運営委員として参加していただいております、特に企業との連携、共同研究関連でアドバイスをいただいております。とにかく地域に企業が少ないと言い訳をするのではなく、地域の企業と一緒にあって国の競争的資金を獲得できるような、そういう取り組みをするのが大学の仕事じゃないか、というご助言は心に響き、非常に重要なことだと思いますので情報提供しておきます。

大石議長：他にないでしょうか。

石井委員：インターンに関してですけど、インターンで企業に来た学生は、その企業に対してインターンで活動した感想やどういうことを学んだということを出す体制になっていますか。

米本校長：それはやっております。報告は必ずするようにしております。

石井委員：企業に対してはいかがでしょうか。

米本校長：企業というか、学校です。学校の方に、そのレポートを出すようにはなっています。ただ会社によっては発表会を会社の方で最後に実施したり、あるいは会社の方に簡単なレポートを提出して、学校で改めてまた別の学校資料のレポートを出すという場合もあるようです。

石井委員：実はうちは今年受け入れたのですけれども、他のインターン、工業高校とか、他の所からは最後に必ずこういうことでこういうことが勉強になりましたとか、苦情があれば苦情も含めてレポートが来ていたものですから、以前から希望していた高専のインターンを今年初めて受け入れることが出来て、とても優秀な学生さんでしたけれども最後にレポートが来ませんでした。こちらからは求めなかったのですけれども。その時にできれば企業向けに必ず何か作文でもいいので出すような指導をしていただければいいのではないかなと思いました。

米本校長：そこは我々として、今やっていることというのは企業から求められれば出すという

形で、逆に言うと他の学校は何もなくとも出しているということですが、今の私どもは同じ事を全部やるというつもりはございません。

それでは、ご指摘にもありますので、本校で報告会を実施しましたので、それが必要かどうか受入先に確認したうえで対応させていただきたいと思います。ありがとうございます。

赤上委員：実は私、内閣府の地域活性化伝道師というのを前からやっているのですが、その友達で東京オリパラの経済関係の委員をやっている、インターンシップの在り方というのを考えている人間がおります。企業に行って、例えば県内企業さんでものづくりをしているそのラインに1週間入るのではなくて、その経営トップにあなたの人生はどうですかとか、この会社についてどう思われますか、どういうふうに発展させたいビジョンをお持ちですかというようなことを伺い、それを2分間ぐらいのビデオにまとめる。そうすると学生達は伝える力、編集能力がついてくるそうです。

そういったことが将来、就職するにあたって、面接やそういう時に非常に役に立つというような報告を聞いております。

単にその会社に行って、時間を過ごすのではなくて、経営トップも忙しいでしょうけれども、そういった仕組みを織り込んでいただければ、学生さんとしての伸びしろというのは拡大すると思われまますので、ご参考にしていただければと思います。

米本校長：参考にさせていただきますけれども、それはむしろ経営、会社の方に言うていただくことかと思ひます。我々の方からインターンシップで派遣しますが、お宅の会社でこういうことやっけてください、ああいうことをやっけてくださいと言へる立場ではござひません。

秋田県の何かの会の時、そういうことをやっけてる会社があるということ、社長さんご自身が言っていることがありました。ですから、それは非常に素晴らしいことだと思ひますので、是非インターンシップを受ける会社の方にそういう形を広めていただけると非常にいいと思ひます。

赤上委員：会社の方に伝えしすし、できれば学校側からも、そういうリクエストをして双方向でやっけていただくと、もっと効率アップするかと思ひます。

あと一点だけ、先ほどいじめの話がありましたが、15歳から20歳ぐらいまで非常に多感な時期ということがござひまして、やはり声に出さない、声に出せない子ども達がいるのではないかということはお心配しているところではす。

ああいう形で計画的にやられてるというのはあるのですが、これはどうやって救えばいいかという、正解を持てはいないのですが、なんとか寄り添っていただけないかなと思ひております。これは実例がある訳ではないですが、非常に多感な時期をこの高専で過ごされていることを考えると、そこら辺をいかにして目を届けるかということになると思ひますので、是非とも寄り添っていただくとようなことをお考えいただければなと思ひます。

今後ますます心の病が増えていきそうな感じもいたしますので、よろしくお願ひしたいなと思ひます。

米本校長：そこは実はアンケートという形で実施してあります。いじめに関しましてはもちろん秘密保持の形で、それから健康に関しましては2年ぐらい前から始めました。だからそうい

うことでさっきも佐藤先生からありましたが、5%ぐらいの学生から色々なアクションがあります。ただそれ以上のことが、何ができるかなあというのがありますので、まずはそれを元にしっかりやるということでやらせていただきたいと思います。

赤上委員：ちょっと気になったのが100%の回答がないってところです。その理由は何でしょうか。

米本校長：これは強要しないということです。こういうアンケートを絶対出さないということで強要があると、これがまた問題になる訳です。もちろん、問題のある学生は出してくださいとはお伝えしております。ただそれ以上は絶対強要しません。「誰々さんが出してない」ということをやりますと、それがまた別の問題を起こしますので、そこはそういう意味で強要しないということです。

赤上委員：わかりました。

大石議長：うちの大学で修士に入った学生の先生と全く違う先生と1年に2回面談日を決めてやっております。ほとんどはサインして終わるのですが、たまにそれにひっかかって問題を言うてくる学生と、全く来ない学生が見つかることがあります。だいたい120名いると90何%以上は何もないです。全く違う先生に会いに行くと、何もないサインで終わりというその方が結構いいかと思いますが、これは、コメントです。

(9) 議長まとめ

大石議長：他にございますか。予定では16時50分に終わるはずでしたが、このような時間となってしまいました。

私からまとめをお話させていただくことになっていたのですが、この資料を見てみますと、本当に熱心にやられているので、とても良い資料と良い報告を受けたと思っております。

皆様から意見とコメントが非常に多いので、これはこの後の懇談会の時に意見を言うていただければと思います。私からは以上です。マイクを司会の企画室長の方にお渡しします。

工藤企画室長：大石議長、どうもありがとうございました。本日は大変貴重なご意見、ご助言を皆様方からいただきまして、誠にありがとうございました。

それでは米本校長から運営協議会委員の皆様にご挨拶申し上げます。

(10) 校長御礼

米本校長：御礼申し上げます。本当に貴重なご意見をたくさんお寄せいただきまして、誠にありがとうございます。この後でございますけれども、今日の議事を録音しておりますので、これを文書にしまして、それぞれの委員の皆様にお届けするということで、その時にこんなこと言っていなかったとか、また出てくるかと思っておりますので、その辺を直していただいて、我々の方も回答に関しても、特に私なんかしゃべり方が下手なものですから、何言っているか分からないことがあるかと思っておりますけれども、もう1回文書にした時に正しくなるようにしたいと思います。

現在 12 月なものですから、来年に入るかと思えますけれども、今年度中に冊子の形で最終的にこの協議会をまとめるという形にしたいと思えます。そういう意味で、もう一度委員の皆様のところにお手数がかかることがあるかと思えますけれども、是非よろしく願いいたします。本日は誠にありがとうございました。

工藤企画室長：本日は長時間にわたりまして、本校の平成 29 年度の活動につきましてご議論を賜り、誠にありがとうございました。これをもちまして、秋田工業高等専門学校運営協議会第一部を閉じさせていただきます。本日はありがとうございました。

なお引き続き懇談会を開催いたします。ご出席の方々につきましては、この場にお残りいただきますようお願いいたします。この後会場の方へご案内いたしますので、しばし休憩とさせていただきます。ありがとうございました。

(11) 懇 談 会

(12) 閉 会



I 総務に関する事項

1. 組織
2. 施設の概況
3. 予算の概要
4. 学校行事
5. 国際交流
6. 地(知)の拠点大学による地方創生事業(COC+)

副校長(総務担当) 野坂 肇

1



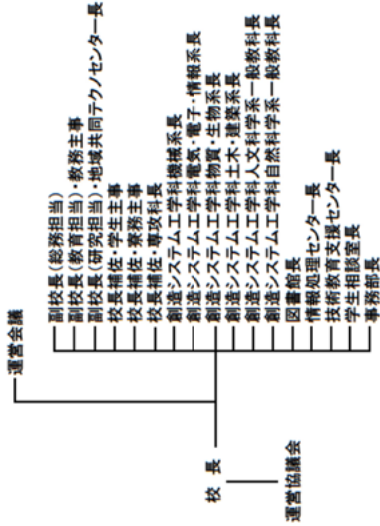
2. 施設の概況

敷 地 (単位:㎡)			
校舎	寄宿舎	運動場	職員宿舎
45,461	18,421	33,625	3,757
合計 101,264			
建 物 (単位:㎡)			
建 物 名 称			延面積
管理棟			1,411
講義室棟、科学技術教育棟(地域共同テクノセンター)、階段教室棟			4,937
機械系棟、電気・電子・情報系棟、物質・生物系棟、土木・建築系棟、研究系棟、専攻科棟			9,267
図書館、情報処理センター、技術教育支援センター実習工場・別館			2,748
寄宿舎(管理棟、東1棟、東2棟、西1棟、西2棟)			5,613
第1体育館、第2体育館、武道場、課外活動施設、厚生会館、その他			5,221
職員宿舎			849
合 計			30,046

3



1. 組織



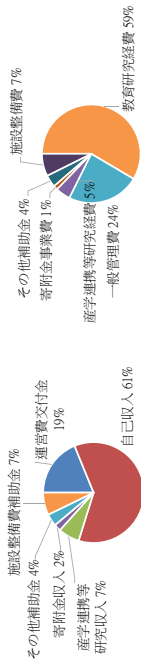
2



3. 予算の概要 (1)平成28年度収入・支出決算額

※ PCB廃棄物処理経費を除く。
(単位:千円)

収入決算額 (単位:千円)			
区 分	決算額	比率	
運営費交付金	67,190	18.8%	
自己収入	217,616	61.0%	
産学連携等研究収入	24,406	6.8%	
寄附金収入	7,893	2.2%	
その他補助金	14,048	3.9%	
施設整備費補助金	25,704	7.2%	
計	356,857		
支出決算額 (単位:千円)			
区 分	決算額	比率	
教育研究経費	204,572	58.5%	
一般管理費	83,364	23.8%	
産学連携等研究経費	17,134	4.9%	
寄附金事業費	4,844	1.4%	
その他補助金	14,048	4.0%	
施設整備費	25,704	7.4%	
計	349,666		



4



3. 予算の概要

(2) 平成28年度収入決算額内訳

※ PCB廃棄物処理経費を除く。

収入決算額 (単位:千円)				自己収入内訳			
区分	決算額	比率		区分	決算額		
運営費交付金	67,190	18.8%		授業料収入	191,101		
自己収入	217,616	61.0%		入学金収入	16,328		
産学連携等研究収入	24,406	6.8%		検定料収入	3,597		
寄附金収入	7,893	2.2%		雑収入	6,590		
その他補助金	14,048	3.9%		産学連携等研究収入内訳			
施設整備費補助金	25,704	7.2%		区分	決算額		
計	356,857			受託研究収入	14,779		
				共同研究収入	2,861		
				受託事業収入	70		
				間接経費収入 (科学研究費分)	6,696		



3. 予算の概要

(3) 平成29年度収入予算

収入予算額(当初予算)の前年度比較 (単位:千円)			
区分	H28予算額	H29予算額	増△減額
運営費交付金	5,306	55,173	+49,867
自己収入	224,574	223,021	△ 1,553
授業料収入	(197,530)	(196,277)	(△ 1,253)
入学料収入	(15,865)	(15,642)	(△ 223)
検定料収入	(3,871)	(3,950)	(+ 79)
その他収入	(7,308)	(7,152)	(△ 156)
計	229,880	278,194	+48,314

※ H28予算額は、PCB廃棄物処理経費を除く。



4. 年間行事(前期)

- ・ 4月 2日(日) 入学式
- ・ 4月 3日(月) 始業式、対面式、学生総会
- ・ 4月18日(火) 開校記念日
- ・ 5月23日(火)～ 前期中間到達度試験
- ・ 6月 2日(金)～ 高校総体
- ・ 6月17日(土)～ 保護者面談期間(～23日(金))
- ・ 7月 1日(土)、2日(日) 東北地区高専体育大会
- ・ 7月24日(月)～ 前期末到達度試験
- ・ 8月 3日(木)～ 夏季休業(～9月18日(月))
- ・ 8月 5日(土) オープンキャンパス
- ・ 8月18日(金)～ 全国高専体育大会
- ・ 9月20日(木) 特別講演会
- ・ 9月27日(木)、28日(金) スポーツ大会



4. 年間行事(後期)

- ・ 10月 1日(日) 東北地区高専ロボコン大会(八戸)
- ・ 10月 8日(日) 全国高専ロボコン大会
- ・ 10月20日(金)～ 東北地区高専ラグビー大会(～24日(火))
- ・ 10月28日(土)、29日(日) 高専祭
- ・ 10月29日(日) 進学ガイダンス
- ・ 11月15日(水)～ 4年生工場見学(～17日(金))
- ・ 11月28日(火)～ 後期中間到達度試験
- ・ 12月 2日(土)、3日(日) デザコン2017
- ・ 12月 3日(日) 全国高専ロボコン大会
- ・ 12月16日(土) 4年保護者進路相談会
- ・ 1月11日(木) 3年学習到達度試験
- ・ 1月20日(土) 推薦選抜入学試験
- ・ 2月13日(火) 後期末到達度試験
- ・ 2月18日(日) 学力選抜入学試験
- ・ 3月3日(土)～ 随時休業、3月20日(火)～ 学年末休業
- ・ 3月17日(土) 卒業証書、修了証書授与式



5. 国際交流

大 学	年 度	平成27年度 (人)		平成28年度 (人)		平成29年度 (人)	
		派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
リール地域技術短期大学 (フランス)		3	4	3	3	2	3
トゥルク応用科学大学 (フィンランド)		0	2	0	1	0	0
ベトナム中央地域 工科大学		0	2	0	2	0	0
シンガポールポリテクニク		16		15		1	
合 計		19	8	18	6	3 (11/30)	3 (11/30)

9



6. 地(知)の拠点大学による地方創生推進事業 (COC+)

拠点大学：秋田大学

参加大学：秋田県立大学・秋田工業高等専門学校

秋田大学COC+は、3つの柱で展開

- 第1の柱「6大学連携による『秋田おらほ学』の展開」
- 第2の柱「3大学と地元企業群による就業支援・若者定着システムの形成」
- 第3の柱「ふるさと秋田の魅力形成モデルづくり」

秋田高専COC+の到達目標

1. 地域教育プログラムとその認定制度によって、卒業生の地域定着
2. Aターン採用によって、即戦力となる人材の地域定着
3. 新卒者の県内就職率を2019年までに現状の1.0%増
(就職希望者135人×20%=**27人**)

10



地域教育プログラムの進捗状況

	平成27年度	平成28年度	平成29年度
授 業	4年 地域史 4年 地域産業 I	4年 地域史 4年 地域産業 I 5年 地域産業 II 5年 地域計画	4年 地域産業 I 4年 地域産業 II 5年 地域産業 II 5年 地域計画
研究会 (東京、秋田)	2回	4回	1回
講演会 (地域理解)	1回	8回	5回 (+3回予定)
研修会 (課題解決)	1回	2回	1回 (+2回予定)
県内就職	15人 (12.8%)	27人 (22.7%)	14人 (10/31)

11



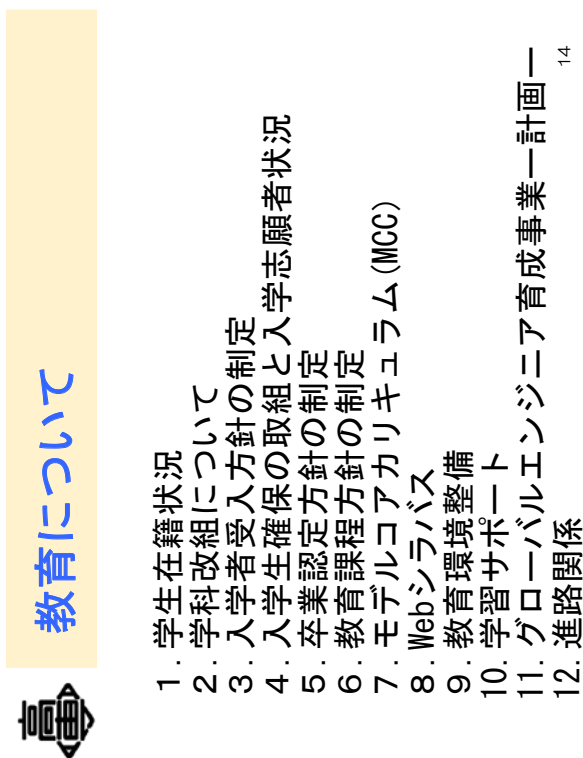
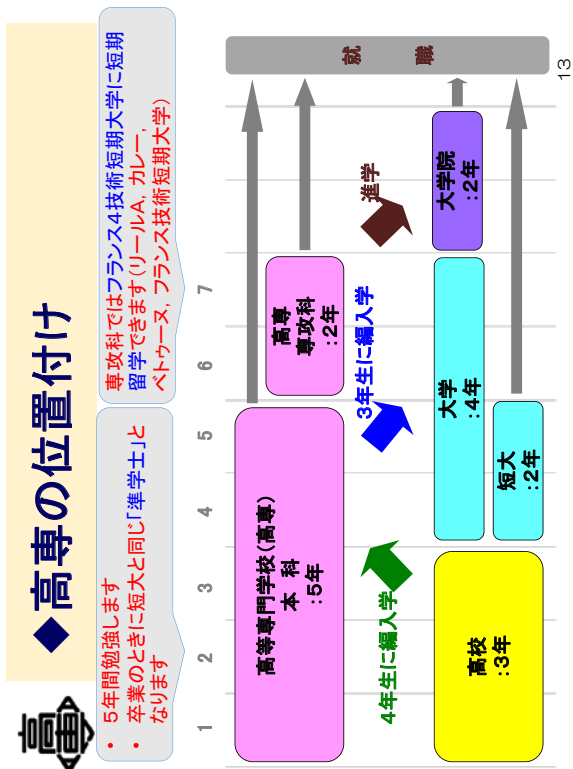
平成29年度 秋田工業高等専門学校協議会

Ⅱ 教育に関する事項(本科)



副校長(教育担当)・教務主事 安東至

12



1. 学生在籍状況

H29. 4. 1

1年	創造システム工学科				168(40)
	機械工学科	電気情報工学科	物質工学科	環境都市工学科	合計
2年	43(3)	43(10)	40(17)	42(13)	168(43)
3年	40(0)	38(5)	42(18)	42(9)	162(32)
4年	43(2)	46(5)	40(11)	39(11)	168(29)
5年	36(0)	36(7)	39(13)	39(8)	150(28)
合計	162(5)	163(27)	161(59)	162(41)	648(132)

本

科

専

攻

科

	生産システム工学専攻	環境システム工学専攻	合計
1年	14(1)	9(0)	23(1)
2年	13(0)	4(1)	17(1)
合計	27(1)	13(1)	40(2)

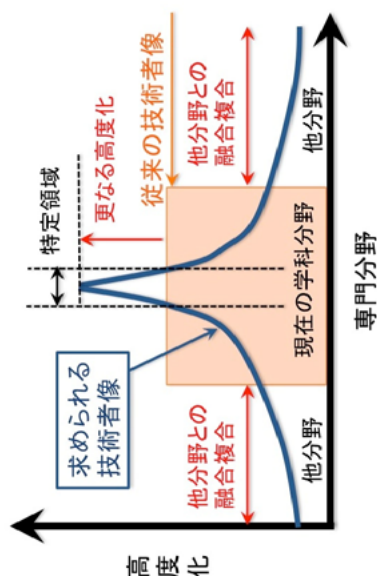
818名(女子172名)が在籍

15



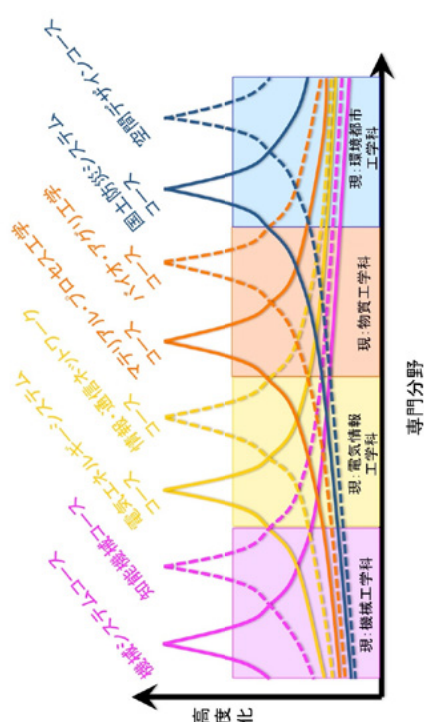
～求められる人物像～

- 飛び抜けた高度な得意分野
- 隣接分野の基礎知識



17

～再編後の育成技術者像～



18

創造システム工学科 (H29年度～)



19

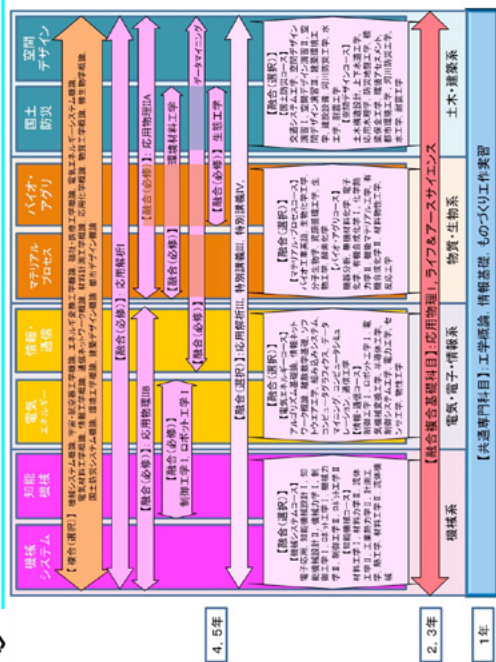
科目配置図



20



創造システム工学科 融合複合専門科目 配置図



21



3. 入学者受入方針の制定

1. 理数系に興味のある人
2. 新しいことを知りたい、理解したいという学習意欲のある人
3. 自ら新しいことに取り組むなど、チャレンジ精神旺盛な人
4. ものづくりに関心のある人

23



選択科目として隔年で開講（4または5年次）
科目提供した系以外に所属する学生が受講可能

複合（選択）科目として科目提供するコース	機械システムコース	知能機械コース	電気エネルギーシステムコース	情報・通信ネットワークコース	マテリアル・プロセス工学コース	バイオ・アグリエコース	国土防災システムコース	空間デザインコース
	機械システム概論 宇宙・航空工学概論	エネルギー変換工学概論 福祉・医療工学概論	電気エネルギーシステム概論 電気材料工学概論	情報工学概論 通信ネットワーク概論	材料計測工学概論 応用化学概論	物質工学概論 微生物学概論	国土防災システム概論 環境工学概論	建築デザイン概論 都市デザイン概論

22



4. (1) 入学生確保の取組

◆ オープンキャンパス参加者数

年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
生徒	236	250	231
保護者	104	114	112
教員	15	13	15
塾講師等	—	—	7
合計	355	377	365

◆ 進学ガイダンス参加者数

年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
生徒	179	139	115
保護者	137	92	66
教員	4	6	7
塾講師等	—	9	6
合計	320	246	194

24



4. (2) 入学志願者状況

◆ 志願者数の推移

年度 学科	平成27年度		平成28年度		平成29年度	
	志願者数	推薦(内数)	志願者数	推薦(内数)	志願者数	推薦(内数)
機械	34	7	58	32		
電気情報	52	27	57	35		
物質	41	20	41	28		
環境都市	41	15	58	32		
合 計	168 (1.05倍)	69 (0.88倍)	214 (1.34倍)	127 (1.59倍)	188 (1.18倍)	120 (1.50倍)

創造システム工学科

25



◆ 女子志願者数の推移

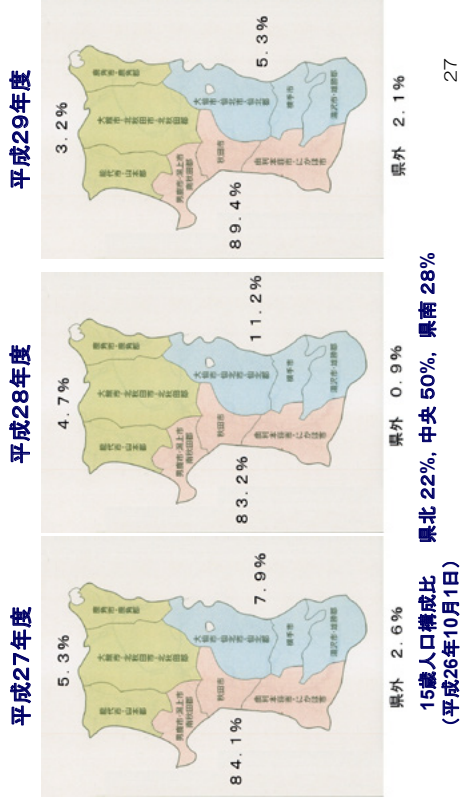
年度 学科	平成27年度		平成28年度		平成29年度	
	志願者数	推薦(内数)	志願者数	推薦(内数)	志願者数	推薦(内数)
機械	0	0	3	2		
電気情報	4	3	11	8		
物質	18	7	20	14		
環境都市	9	3	13	7		
合 計	31 (18.5)	13 (18.8)	47 (22.0)	31 (24.1)	41 (21.8)	33 (27.5)

創造システム工学科

26



◆ 地域別志願者比率



27



5. 卒業認定方針

(A) 人類の幸福

目標: 地球環境や人間社会と技術の調和を視野に入れて人類の幸福を考え、技術者倫理を理解し、責任ある行動がとれる。(健康・誠実)(責任)

(B) 工学基礎知識の修得

目標: 生産の現場に不可欠な実践的かつ専門的な知識と技術を有する。

(C) 専門的知識の充実

目標: 自ら問題を発見・解決する能力を備え、生涯に亘って自ら学ぶことができる。

(D) コミュニケーション能力

目標: 産業社会におけるグローバル化に対応するため、正しい日本語で表現(記述・口述・討論)し、かつ国際的に通用するプレゼンテーション能力を有する。

(E) 技術の発展

目標: 複雑で多岐に亘る工業技術分野に貢献できる技術を有し、融合複合領域にも対応できる能力を備える。

28



6. 教育課程方針 (2)

(D) コミュニケーション能力

(D-1) 正しい日本語で表現(記述・口述・討論)することができる。

(D-2) 英語によるコミュニケーションに必要な基本的能力を身に付ける。

(D-2) 英語によるコミュニケーションに必要は基本的能力を身に付ける。

(E) 技術の発展

(E-1) 専門領域および複合領域の専門知識を統合して、目的を達成するための問題解決とデザインに寄与できる。(挑戦)

行ってゆくことができる。(創造・研究)

(C) 専門的知識の充実

(C-1) 得意とする専門分野の問題を発見し、解決することができる。(自立)

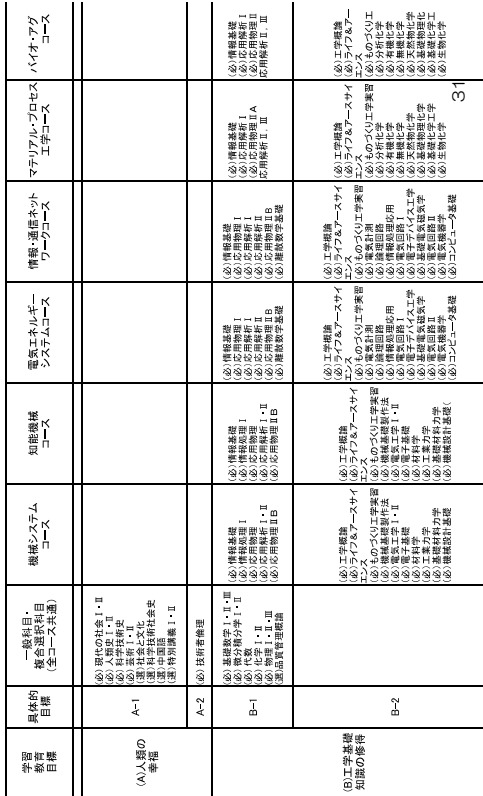
(C-2) 実験・実習科目を通して実践的な知識を身に付ける。

(C-3) 企業での実体験などをとくに、地域や社会の要求している内容を理解できる。(協働)

(C-4) 限られた時間内で、個別に、あるいはチームワークによって、技術的問題を含む課題に取り組み解決することができる。(協働・挑戦)²⁹



7. モデルコアリキュラム (MCC)



コアカリキュラム

国立高専のすべての学生に到達させることを目標とする最低限の能力水準・修得目標

モテル

高専教育のより一層の高度化を図るための指針

8. Webシラバス

■ MGCに準拠し、講義目的、毎回の授業内容、到達目標について定め、達成度評価（ルーブリック評価）を実施する

■ Web上で確認でき、科目間の紐づけ可能



9. 教育環境整備

- Eラーニング，アクティブラーニング推進のためのICT環境整備
- 複数クラスに対応した多目的教室の整備
- 10. 学習サポート
- TA，SAを活用した学習アドバイザー制度
- TOEIC，英検，漢検などの指導サポート

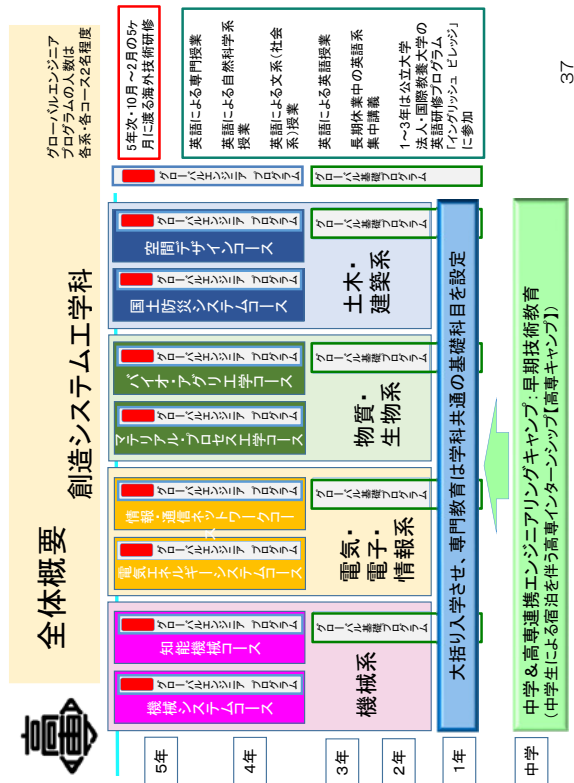


11. グローバルエンジニア育成事業

- 一 計画 (高専寮の積極的活用)
- 中学・高専エンジニアリングキャンプ (参加人数30人)
● 夏季休業中に高専寮を活用した理数系の課題解決型カリキュラムと
● 英語の特別カリキュラムを早期技術者教育 (3泊4日) として実施する。
- グローバル基礎プログラム (1~3年: 40人/学年)
● 英語による英語、一部文系・自然科学系授業を実施する。
● 国際教養大学のイングリッシュビレッジへの参加を推奨し、
● 本校において夏季集中英語講義を実施する。
- グローバルエンジニアリングプログラム (4~5年: 16人/学年)
● 特別カリキュラムの英語による夏季専門科目集中講義を実施する。
● 5年後期に卒業研究単位として読替できる長期海外技術研修を実施し、
● グローバルエンジニアとしてTOEIC 600点以上の英語による高いコミュニケーション
● ニケーション基礎力を確保する。
- 36

投題計画		授業内容・方法	到達目標
1週	授業ガイダンス 授業ガイダンス (1) 授業ガイダンス	電圧、電流などの電気量を説明できる。	
2週	(2) オームの法則	オームの法則を理解し、計算できる。	
3週	(3) 閉路・分路回路の分圧・分流	閉路・分路回路がわかり、分圧や分流の計算ができる。	
4週	(4) 直列・並列・電圧源	電圧源と電流源の特性を説明できる。	
5週	(4) 回路方程式	キルヒホッフの法則を説明することにも、利用して回路方程式を立てることができる。	
6週	(5) 電圧源	非起電力の電源、ディナミクスの電源などの電気回路の根本となる特性を説明し、電圧源を用いて電圧量を算出する計算を得意とする。	
7週	(6) 電圧源と各変置	任意の電圧源を用いて、各変置の法則を利用して電圧量を算出する。	
8週	(7) 電圧源と抵抗 (抵抗中絶)	已記項目について習熟した内容の理解を深める中で確認する。	
9週	11週までの学習 12週までの学習 (1) 交流電圧の表現 (2) 交流電流の表現	交流電圧の値と、実効値、有効値との違いと関係性を説明し、交流電圧の値と、実効値、有効値との関係性を説明し、交流電圧の値と、実効値、有効値との関係性を説明する。	
10週	(2) 交流電圧の表現と表示	交流電圧の値と、実効値、有効値との関係性を説明する。	
11週	(3) 交流電圧の表現と表示	交流電圧の値と、実効値、有効値との関係性を説明する。	

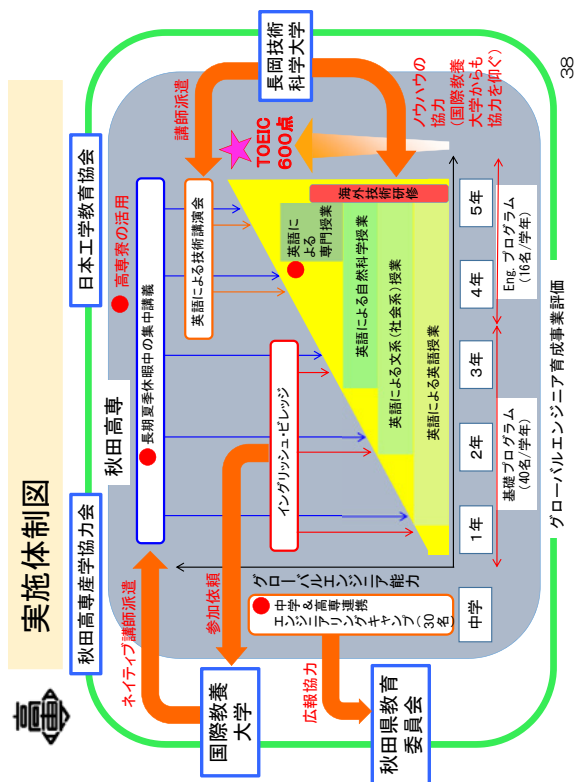
講義目的、内容、到達目標、評価方法など
授業に関する情報を全科目について公開



12. 進路関係

H29. 3. 31									
昨年の進路状況									
卒業生数 (人)	求人数 (県内)	就職 内定者数 (人)	県外 内定者数 (人)	県内 内定者数 (人)	求人 倍率	進学 者数 (人)	大学 内定数 (人)	専攻 科内 定数 (人)	進路 未定 (人)
機械 工学科	40(2)	554 (20)	30 (2)	20 (1)	10 (1)	18.5	10 (0)	4 (0)	6 (0)
電気 情報 工学科	39 (1)	592 (19)	28 (0)	25 (0)	3 (0)	21.1	11 (1)	3 (0)	8 (1)
物質工 学科	39 (14)	279 (9)	26 (10)	23 (9)	3 (1)	10.7	13 (4)	12 (4)	1 (0)
環境都 市工学 科	39 (6)	376 (17)	25 (4)	18 (2)	7 (2)	14.5	13 (1)	5 (1)	8 (0)
合計	157 (23)	1801 (65)	109 (16)	86 (12)	23 (4)	16.4	47 (6)	24 (5)	23 (1)
									39

昨年の進路状況

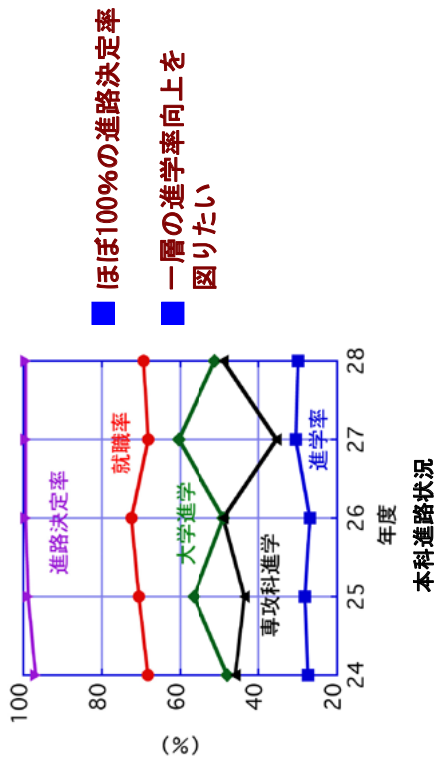


本年度の進路状況

	卒業 予定数 (女)	求人 数 (県内)	就職 内定者数 (女)	県外 内定数 (女)	県内 内定数 (女)	求人 倍率	進 学 者 数 (女)	大 学 内 定 数 (女)	算 政 科 内 定 数 (女)	進路 未 定 (女)
機械 工学科	36(0)	547 (32)	26 (2)	22 (0)	4 (0)	21.0	9 (0)	4 (0)	5 (0)	1 (0)
電気 情報 工学科	36 (7)	648 (34)	20 (4)	20 (4)	0 (0)	30.9	15 (2)	7 (1)	8 (1)	1 (0)
物質 工学科	39 (13)	222 (18)	25 (10)	22 (9)	3 (1)	8.9	14 (3)	11 (2)	3 (1)	0
環境都市 工学科	37 (8)	332 (32)	27 (5)	23 (4)	4 (1)	11.4	8 (2)	4 (1)	3 (1)	2 (1)
合 計	148 (28)	1749 (116)	109 (19)	87 (17)	11 (2)	17.3	45 (7)	26 (4)	19 (3)	4 (2)



進路状況の推移



41



進路関係

就職希望が70% 進学希望が30% (H29年3月本科卒業生)

これまでの主な進学先

本科生

北海道大学、室蘭工業大学、弘前大学、岩手大学、東北大学、
秋田大学、秋田県立大学、山形大学、福島大学、筑波大学、
宇都宮大学、千葉大学、東京農工大学、電気通信大学、新潟大
学、長岡技術科学大学、富山大学、金沢大学、信州大学、
豊橋技術科学大学、名古屋大学、岡山大学、早稲田大学
秋田高専専攻科

43



進路関係

就職希望が70% 進学希望が30% (H29年3月本科卒業生)

主な就職先

本科生

JR北海道、JR東日本、JR東海、新日鉄住金、本田技研工業、
JFEスチール、富士重工、東北電力、東京電力、サントリー、
ファナック、TDK、JXエネルギー、東燃ゼネラル石油、資生堂、
テバ製薬、日本ゼオン、三菱電機ビルテクノ、東邦化学工業、
小松製作所、昭和電工、関東化学、三井化学、宇部興産、
五洋建設、水ing、日本源燃、鴻池組

秋田銀行、アルフレッシュファインケミカル、秋田県、
秋田県工業技術センター、秋田市、由利本荘市

42



平成29年度 秋田工業高等学校校運営協議会

資料4-3

Ⅲ 専攻科に関する事項

専攻科長 桜田良治

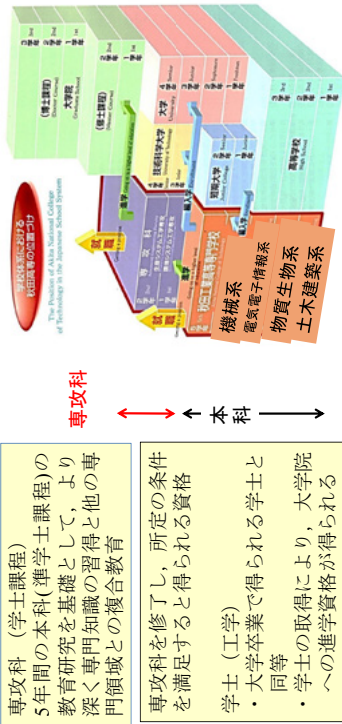
秋田工業高等学校専攻科

44



専攻科の教育体系

- ・ 平成6年設置
- ・ 生産システム工学専攻 (機械系と電気・電子・情報系の融合) 8人
- ・ 環境システム工学専攻 (物質・生物系と土木・建築系の融合) 8人



45

秋田工業高等専門学校専攻科



入試の状況

1. 5年間の入試の状況 (H26-H30)

定員16名(生産システム8名, 環境システム8名)

専攻/入学年度	H26	H27	H28	H29	H30
生産システム工学専攻	2.25	2.88	2.13	2.00	2.75
環境システム工学専攻	1.75	0.63	1.50	1.25	1.13
全体	2.00	1.75	1.81	1.63	1.94

高等専門学校評価基準(機関別認証評価H29.1)
 準学士課程の学生の受入れ 大幅に超過, 又は不足していないか。

2. 学力試験の受験科目

平成30年度入試より実施
 TOEICスコアによる英語受験の免除
 専門教科受験科目数 3科目選択/12科目(各専攻)

47

秋田工業高等専門学校専攻科



教育の特長

- 1. 複合教育**
 自身の専門分野以外の専門領域の知識と技術の習得。
 生産システム特別実験, 環境システム特別実験
- 2. 一貫教育**
 学士=本科4, 5年+専攻科1, 2年
 一貫教育=本科から連続した教育プログラム
- 3. 少人数教育**
 数人~20人程度/クラス
 インターナシップ, 海外インターンシップ
 基礎研究/卒業研究/特別研究
- 4. 実践的教育**
 基礎知識と理論に基づいた, 応用課題への取り組み。
 創造工学演習

46

秋田工業高等専門学校専攻科



学士(工学)取得, 進路の状況

1. 学士(工学)の取得, 進学, 就職の状況 (H25-H29)

専攻	項目/卒業見込年度	H25	H26	H27	H28	H29 (11/30)
生産システム工学専攻	学士取得率, %	100	100	100	100	
	進学率, %	12	38	56	40	8
	就職率, %	88	62	44	60	85
環境システム工学専攻	県内就職率, %	7	0	0	44	27
	学士取得率, %	100	100	100	100	
	進学率, %	0	36	20	67	50
	就職率, %	100	64	80	33	50
	県内就職率, %	25	14	13	0	50
合計	学士取得率, %	100	100	100	100	
	進学率, %	8	38	37	44	18
	就職率, %	92	62	63	56	76
	県内就職率, %	13	7	8	40	31

48

秋田工業高等専門学校専攻科



2. 大学院進学先／就職先 (H25-H29)
(1) 生産システム工学専攻 (H29年度大学院進学予定先(就職内定先:赤))

専攻	進路	進学先/就職先
生産システム工学専攻	大学院進学	秋田大院、東北大院、豊橋技術大院、 長岡技術大院 、北陸先端科技大院
	就職	秋田エプソン、秋田高専、朝日インテック、いすゞエンジニアリング、NECフイーデルテイング、NOK、NTT-ME、 男鹿市役所 、オークマ、学習塾秋田キャンパス21、コスモリサーチ、小林工業、 五洋電子 、サントリプロダクト、シーケーエンジニアリング、JXエン지니어リング、JFESチャール、 スズキ部品秋田 、 スタンレー電気 、セイコーエプソン、 太陽日産 、タマディック、 DMG森精機 、 東北エプソン 、東芝ブランドシステム、東洋水産、ナカヨ通信機、 日産テクノ 、日鉄住金 テックスエンジニア 、日本新金屬、東杜シーテック、日立アドバンストデジタル、日立システムズ、富士電機、扶桑精工、北海道電力、三菱電機エンジニアリング、三菱マテリアルテクノ

秋田工業高等専門学校専攻科

49



外部機関による評価（1）

1. 機関別認証評価
平成27年3月 審査結果：評価基準を満足
2. JABEE審査
平成27年3月 審査結果：評価基準を満足
3. 認定専攻科における教育の実施状況の審査
短期大学及び高等専門学校の専攻科の認定に関する規則 (H16規則第19号)
平成23年5月 審査結果：適

秋田工業高等専門学校専攻科

51



2. 大学院進学先／就職先 (H25-H29)
(2) 環境システム工学専攻 (H29年度大学院進学予定先(就職内定先:赤))

専攻	進路	進学先/就職先
環境システム工学専攻	大学院進学	秋田大院、 千葉大院 、東北大院、東京電機大院、豊橋技術大院、北陸先端科技大院、 北海道大院 、山形大院
	就職	秋田県建設・工業技術センター、秋田県林業コンサルタント、旭化成、遠藤設計事務所、近代設計、クラレ、鴻池組、 五洋建設 、三光不動産、森林テクニクス、JXエンジニアリング、JPハイドテック、TDK、DIC、DICグラフィックス、 ニプロファーマ(大館工場) 、日本触媒、日本バイリーン、パシコン技術管理、三井造船鉄構エンジニアリング、宮地エンジニアリング、森永乳業、りんかい日産建設

秋田工業高等専門学校専攻科

50



外部機関による評価（2）

4. 専攻科の学士の学位の授与に関わる特例適用認定審査
学位規則第6条1項による学士の学位の授与に関わる特例に関する規則 (H26規則第1号)
平成26年5月 審査結果：適用認定
5. 平成30年度特例適用専攻科における教育の実施状況等の審査
認定専攻科 7年毎 } 特例適用専攻科 5年毎
特例適用認定 5年毎 } H30.05.31
6. 平成29年度秋田工業高等専門学校運営協議会

秋田工業高等専門学校専攻科

52



専攻科の課題

1. 受験生の確保と質保証
本科生への専攻科進学の進路指導
専攻科への進学と大学への編入学、及び就職先
進学の選択肢、研究の継続性、学費
2. 国際性の強化
国際性を身に付けた人材育成
国際交流提携校数の拡大
3. 専攻科の再編
1専攻複数コース制の導入
4. 特例適用認定の維持
全学的研究環境の充実

秋田工業高等専門学校専攻科

53



平成29年度 秋田工業高等専門学校運営協議会

資料4-4

IV 学生指導に関する事項



(4月配布「学校だより」表紙 H28年度バスケットボール女子 全国大会出場)

学生主事 佐藤恒之

55



高等専門学校と大学の共同教育課程の構築支援 【新規】

○深化する専門分野、他分野との融合、複合的研究、高度化・複雑化する
知財分野等、高専単独では対応が困難な分野を中心に、技術科学大学や地
域の理工系の大学等との共同教育課程設置。
○高等専門学校設置基準を改正するとともに、共同教育課程に必要な経費
を支援。



秋田工業高等専門学校専攻科

54



1. 学生指導の体制

ー 本科学生及び専攻科学生の厚生補導のための委員会組織等 ー

学生スタッフ ー 学生主事 副学生主事 学生主事補(2名) 学生支援係	
学生会委員会 (学生スタッフ+学生会員)	奨学金、授業料免除、賞罰規則、通学指導等
クラブ等指導教員会議 (学生スタッフ)	クラブ活動指導教員配置
いじめ防止・対応委員会 (学生主事(副委員長)、副学生主事)	いじめ防止基本方針 防止対策
学生相談室 (副学生主事(室長))	学生の不安悩み相談、勉強の支援
学生会指導 (学生スタッフ+学生会役員)	高専祭、合同会議の開催
高専体育大会	交通安全教室の開催
	各種啓発講演会 など

56



2. 事故防止への取り組み

表1 平成28および29年度 事故届件数

	(1)総量中	(2)クラブ活動	(3)登下校	(4)その他	小計
平成28年度	8	26	6	0	40
平成29年度	4	14	9	2	29
計	12	40	15	2	69

- (1)校内における授業中のケガ(捻挫など)
(2)クラブ活動中(大会中)のケガなど
(3)登下校時における自転車交通事故(自損、衝突事故など)
(4)その他休日中の事故(バイク事故)など
- (平成29年度は12月1日現在)

不注意などによる自損(ケガ)が大半、
自殺者、いじめが原因などの大きな犯罪事故の報告はない

57



2. 1 具体的な事故防止取り組み例

■学校の取組

- ・全自転車通学生への個人賠償責任保険加入の義務付け(H29年度開始)
- ・通学指導の強化(登下校時の通学指導)
- ・学校近隣住民との会話促進



通学自転車用 ステッカー(H29年度用)

58



通学指導(その1)

前期 通学指導分担表(学生委員会委員数16名)

H29年度前期通学指導要項									
日	時	平成29年4月21日(金)～7月12日(水)		8:30～8:40					
指導要項									
1. 自転車の交通違反(右側通行、並進走行、急制し走行、急発進走行、ヘッドホン装着、交差点での一時停止、ハンドル改造、二人乗り)									
2. 歩行者マナー(歩み止まり、左側歩行)									
3. 服装・身なり(サンダル履き、身なり、除髪、ピアス)									
1. 学生支援係で記録簿、ジャンパー、旗を受け取り、指定場所での指導をお願いします。									
2. 交通規則や校則に違反すると思われる場合には指導し、学年、学科(組)、氏名、指導事項(記録簿)に記入して下さい。									
3. バイクに関する指導は安全のため必要ありませんが、交通規則に違反すると思われる場合には、記録簿に必要事項を記入願います。									
4. 指導に対して不服がある場合には、直接学生主事に申し出るように伝えてください。									
通学指導分担表									
指導員(組)	4/21(金)	4/25(火)	5/1(水)	5/18(木)	6/1(水)	6/26(月)	7/12(水)		
佐藤(組)	(2)	(1)	(1)	(4)	(3)	(2)	(2)		
西澤	(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(1)	(1)		
石塚	(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(1)	(1)		
小林	(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(1)	(1)		
木澤	(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(1)	(1)		
原田	(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(1)	(1)		

59



通学指導(その2)

高専近隣の通学状況調査、下校指導



60

2.2 具体的な事故防止取り組み例

- 秋田県、秋田市、JR東日本、秋田臨港警察署、
飯島地区町内会等との協力促進



- ・「秋田工業高等専門学校警察連絡制度」に関する協定の締結（H28年度）
- ・地域自動車安全利用モデル校指定（H29年度）
- ・定期的な交通安全教室の実施
- ・秋田臨港地区少年保護育成委員会との懇談会

3. 学生の健康維持

3.1 学生相談室の対応体制の見直し

- 室長に副学生主事を充て、学生に寄り添う体制を強化
(H29年度組織改正)
- TA (Teaching Assistant) および SA (student assistant) の導入による学生同士の勉学の悩み解消制度



平成29年度 前期 学生相談室案内

3.2 学生の心身健康調査

□「こころと体の健康調査(年2回、7月と10月)」および「いじめアンケート調査」(年1回、10月)の実施による学生の心身健康状態の把握と対応

- 「こころと体の健康調査」第1回(7月実施) 調査数800名、回答者数756名
「こころと体の健康調査」第2回(10月実施) 調査数793名、回答者数696名

【調査票を「希望応答判定」で配属したヘルプ面談を要判定】
 【面談実施(専門医、カウンセラー、相談員)】
- 「いじめアンケート調査」(10月実施) 回答者数751名
 ① 点検項目一いじめ防止推進法の項目に準拠して設定
 ② 回答を要しないこと(回答しない項目)に限定して実施したところがある(SNSやメールなど)

4. 「秋田工業高等専門学校いじめ防止基本方針」の制定

秋田工業高等専門学校いじめ防止基本方針 抜粋(H29.12.6一部改正)

秋田工業高等専門学校いじめ防止基本方針

平成26年7月3日制定

【いじめの禁止等】 いじめが本校の全ての学生に関係する問題であることと鑑み、学生が安心して学習その他の活動に取り組むことができるように、学校の内外を問わずにいじめが行われないようにすることを目指すとして行う。

いじめの防止等のための対策は、全ての学生がいじめを受けることを得ずして行われ、いじめられる側を認識しながらそれを回避するように努めることにより、いじめの心算に及ぼす影響などの被害はいじめの発生を防ぐ学生の意識を高めることに資すると行われるべきものであることとする。

いじめを助長する行為については、いじめを行う学生の生命及び身体的安全を確保することが特に重要であることを認識しつつ、機密、本校、地域住民、家庭その他の関係者の理解の下に行う。

【いじめの定義】 秋田工業高等専門学校（以下「本校」という。）の学生に対して、本校に在籍している者又は本校から退学した者がいじめを受けたと認めた場合には、いじめの対象となつた事実の有無を問わないものとする。

【いじめの禁止】 学生は、いじめを行ってはならない。

【学校長・教職員・事務員の責務】 いじめを防止する学生の権利を保障し、いじめを抑制するとともに、いじめの被害を受けた学生に対し適切な支援を行うとともに、いじめの被害を受けた学生に対する適切な対応を行う。また、いじめの被害を受けた学生に対する適切な対応を行うとともに、いじめの被害を受けた学生に対する適切な対応を行う。

(秋田工業高等
専門学校HPI二
公署)



4. 1 いじめ防止・対応委員会

- ・「秋田工業高等専門学校いじめ防止基本方針」に基づく
「**秋田工業高等専門学校におけるいじめ対応要領**」の

制定、および

「**いじめ防止・対応委員会**」(旧いじめ防止対策委員会)の
設置

委員会の組織

- (1)校長、(2)副校長(教育担当)、(3)副校長(総務担当)、(4)校長補佐(学生主事)、
(5)校長補佐(業務主事)、(6)校長補佐(専攻科長)、(7)学生相談室長、
(8)事務部長、(9)総務課長、(10)学生課長、(11)その他校長が必要と認めた者

65



H28年度飛行ロボットコンテスト ユニークデザイン部門全国第1位



67



5. クラブ活動状況ならびに指導体制

5. 1 クラブ活動の現状

体育系、文化系、ならびにコンテスト系クラブ総数は合計34団体。

表2 H28,29年度高等体育大会東北大会優勝ならびにコンテスト系クラブ全国大会出場個人団体

	団 体	個 人	コンテスト
平成28年度 (秋田主管校)	4(ラグビー、女子バスケット、ハンドボール、柔道)	16(女子剣道、水泳、陸上競技、バドミントン男子、テニス、柔道、卓球女子)	2(飛行ロボット、デザインコンペティション)
平成29年度 (分散開催)	2(ラグビー、サッカー)	10(男子剣道、女子テニス、水泳、陸上競技)	3(ロボット、飛行ロボット、デザインコンペティション)

H28年度 飛行ロボットコンテスト
H29年度 “ ”
H29年度 全国高専デザインコンペティション2017
ユニークデザイン部門**全国第1位**
飛行競技(一般部門) **全国第2位**
創造デザイン部門
全国最優秀賞(文部科学大臣賞)

66



6. 学生の表彰および処罰状況

6. 1 表彰規則の改正(H28年度)と表彰者数(H28年度)

- ・秋田高専賞 2名 (卒業生、卓越した成績優秀者に与えられる卓越学生授業料免除者)
- ・学年優秀賞 20名 (学年末総合成績がクラス上位1番の者、懲戒処分がなかった者)
- ・功績賞 26名 (学生会会長、寮生学生会長、学術的な活動により本校の名譽を高めた者、学会など学外団体の表彰者、特に顕著な成績を取めた者については「後援会長賞」、
「産学協力会長賞」の表彰者として推薦)
- ・奨励賞 10名 (団体活動などで自己研鑽につとめ優秀な成績を上げた者)
- ・皆勤賞 15名 (在学期間中、欠席日数、欠課時数の無い者)

68



平成28年度卒業生・修了生受賞者一覧

平成28年度卒業生・修了生受賞者 一覧

平成28年度 受賞者一覧			
卒業生・修了生			
後援会会長賞	功績賞	功績賞	功績賞
電気情報工学科15年 石川 恵太 加藤 淳	学生会長として貢献 電気情報工学科15年 石川 恵太 加藤 淳	学生会長として貢献 電気情報工学科15年 石川 恵太 加藤 淳	学生会長として貢献 電気情報工学科15年 石川 恵太 加藤 淳
産学協力会会長賞	功績賞	功績賞	功績賞
生産システム工学科12年 二浦 翔平	第12回全日本学生重工業コンテスト入賞 機械工学科15年 五十嵐 大樹 菅原 拓斗	第12回全日本学生重工業コンテスト入賞 機械工学科15年 五十嵐 大樹 菅原 拓斗	第12回全日本学生重工業コンテスト入賞 機械工学科15年 五十嵐 大樹 菅原 拓斗
秋田県教育賞	奨励賞	奨励賞	奨励賞
第1卒業生から現在まで20年以上経つ卒業生奨励賞 電気情報工学科15年 煤 賢司 千田 凌我	第2卒業生から現在まで10年以上経つ卒業生奨励賞 電気情報工学科15年 加藤 瑞希 長谷川 大樹	第2卒業生から現在まで10年以上経つ卒業生奨励賞 電気情報工学科15年 加藤 瑞希 長谷川 大樹	第2卒業生から現在まで10年以上経つ卒業生奨励賞 電気情報工学科15年 加藤 瑞希 長谷川 大樹
学生優秀賞	奨励賞	奨励賞	奨励賞
第1卒業生における卒業生優秀賞 電気情報工学科15年 吉田 一貴 煤 賢司	第2卒業生における卒業生優秀賞 電気情報工学科15年 加藤 瑞希 長谷川 大樹	第2卒業生における卒業生優秀賞 電気情報工学科15年 加藤 瑞希 長谷川 大樹	第2卒業生における卒業生優秀賞 電気情報工学科15年 加藤 瑞希 長谷川 大樹
功績賞	奨励賞	奨励賞	奨励賞
特別研究及び卒業生に優秀な成績 機械工学科15年 千田 凌我 福田 誠	特別研究及び卒業生に優秀な成績 機械工学科15年 千田 凌我 福田 誠	特別研究及び卒業生に優秀な成績 機械工学科15年 千田 凌我 福田 誠	特別研究及び卒業生に優秀な成績 機械工学科15年 千田 凌我 福田 誠

69

(4月配布「学校だより」より抜粋)

70



平成29年度秋田工業高等専門学校運営協議会 V 寮の運営に関する事項

資料4-5



寮務主事 石塚政吾

71



6. 2 学生の処分状況

□「秋田工業高等専門学校懲戒に関する申し合わせ」の一部改正
(H28年度より実施)

「なんらかの違反行為により懲戒の処分(退学、停学、停学、停学、停学)を受けた者は、
2回目の懲戒の処分を受けた場合、すべて無期停学とする。」

表3 平成28および29年度 懲戒処分学生数

	処分を受けた学生	処分理由
平成28年度	6	学規則違反
平成29年度	7	試験時不正行為、 つきまとい行為

(平成29年度は12月1日現在)



寮の運営方針

学生寮は、学生の修学及び規律ある共同生活の場としての教育並びに厚生の施設とする。(寄宿舎規則第2条)

修学

寮生である前に学生である。
規則正しい生活に基づく学業成就こそが本務。

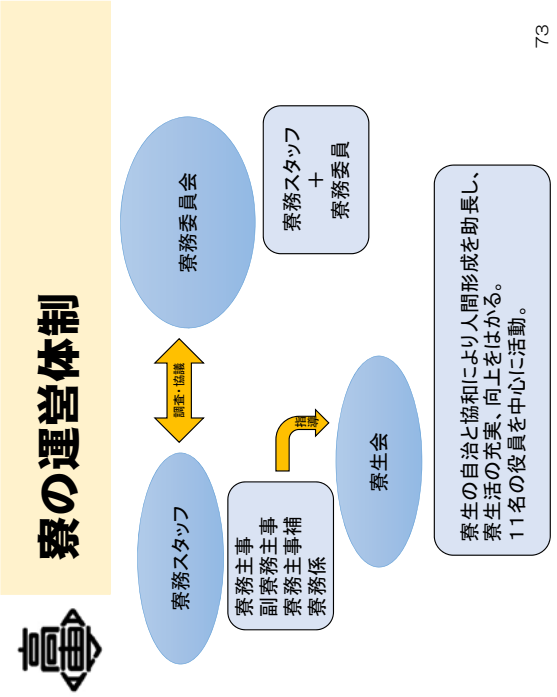
教育

集団生活を通じての人間形成を図るための教育の場。(学生便覧)

厚生

安全管理と食事の提供。
行事を通じて相互の親睦を深める。

72



入寮状況

	平成27年度	平成28年度	過去3年(4/1現在)
1年	32(8)	30(5)	平成28年度
2年	41(7)	31(8)	29(4)
3年	20(3)	39(6)	27(4)
4年	26(3)	17(2)	30(7)
5年	22(5)	24(2)	35(5)
1年	4(0)	0(0)	14(2)
2年	2(0)	4(0)	7(0)
留學生	10(3)	9(2)	0(0)
計	157(29)	154(25)	9(3)
			151(25)

()は内数で女子
他に短期留學生が毎年3～6名程度滞在

寮生的一天

自律的な学校生活で修学をサポート。
共同生活を通しての人間形成をめざす。

日課表

平日	7:00	7:30	7:40 ~8:30	11:50 ~12:40	17:50 ~18:40	21:00	23:30
日曜	起床	点呼	朝食	昼食	夕食	学習 入浴	点呼 消灯
休日	-	-	7:40 ~8:10	*10:00 ~10:30	17:50 ~18:40	17:00 ~22:00	21:00 23:30

* 休日を除き三食とも食堂で摂ります。休日は10:00~10:30の間に昼食を配布します。

サポート体制

青雲家のセキュリティ — 安心・安全の24時間体制

寮務事務員

宿直教員



在寮確認（点呼システム）

毎日2回。
健康管理。



● 寮生生活費	寮生生活費	寮生生活費
● 寮生生活費	寮生生活費	寮生生活費
● 寮生生活費	寮生生活費	寮生生活費

寮経費一覧

入寮費	寄宿料	寮費	給食費	寮生会費	寮生会入会金
3,000円 (入寮時)	700/800円 (月額)	10,680円 (月額)	約25,000円 (月額)	5,000円 (年額)	1,000円 (入寮時)

※1 寮費が800円、二人部屋が700円です。
※2 夏期水費、冬期暖房費、電気、特別献立費等に充てられます。なお、寮費は電気や水道など慣例による価格変動があり、場合によって追加徴収することがあります。

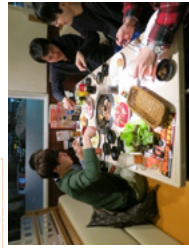


主な年間行事 - 寮生会が企画・運営

10月 なべっこ満足



1月 予餞会



1月 スポーツ大会



主な年間行事 - 寮生会が企画・運営

4月 新入生歓迎会



6月 祭 祭



5月 早稲サッカー



資料4-6

平成29年度 秋田工業高等学校 学校運営協議会

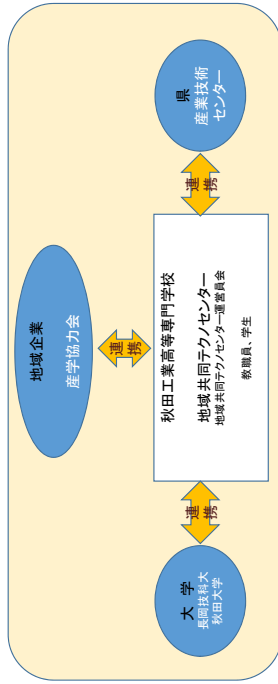
VI. 研究・社会連携に関する事項

副校長(研究担当)
宮脇 和人



地域共同テクノセンターの取り組み

地域共同テクノセンターが窓口となり、秋田高専産学協力量員をはじめとした地域企業や県庁、近隣大学等の学術機関と連携。



81



活動状況1

(1)企画行事の継続的開催を実施

- ①平成29年度 最先端技術講演会(6月7日)
- ②科学研究費助成事業講習会は、(9月11日、12日、14日)
- ③外部資金獲得ガイド説明会、個別相談会(9月11日)
- ④第18回技術研究会(9月17日)

(2)県内外の連携事業に参画

- ①第1ブロック高等専門学校テクノセンター長等会議(11月7日)
- ②秋田産学官共同研究拠点センター新技術説明会(11月14日 東京JSTホール)
- (3)地域共同テクノセンター報15号を発刊。(11月)

82



活動状況2

秋田高専産学協力量の取り組み

・地元企業と高専との交流のパイプをもっと太くすることを目的に設立

- ・秋田県内企業 81社 (平成29年9月現在)
- 会長 菅原雅史(インスベック株式会社代表取締役社長)
- 年間12社の増加(平成28年11月～平成29年9月)

中央地区、県北、県南での総会・研修会を開催

1. 定期総会 平成29年5月31日 (秋田市)
2. 地区講演会平成29年9月4日 (大館市)
- 工場見学会 株式会社 小滝電機製作所
- 秋田高専シーズ紹介 2件
3. 地区講演会平成29年12月12日 (由利本荘市)
- 工場見学会 由利工業 株式会社
- 秋田高専シーズ紹介 2件

84

(4)知的財産関連の活動

知的財産権セミナー特別講演会(12月6日)

対象：本科5年生、教職員、産学協力量会会員企業等

(5)企業訪問を推進した。

コーディネーターが 県内企業を訪問。

(6)産学連携についての取組計画

①秋田県産業技術センターとの共同研究を実施。

②秋田産学官共同研究拠点センター事業運営委員会

に参加し、地域連携の推進。

(7)秋田産学官連携フォーラム2017(11月27日)

83

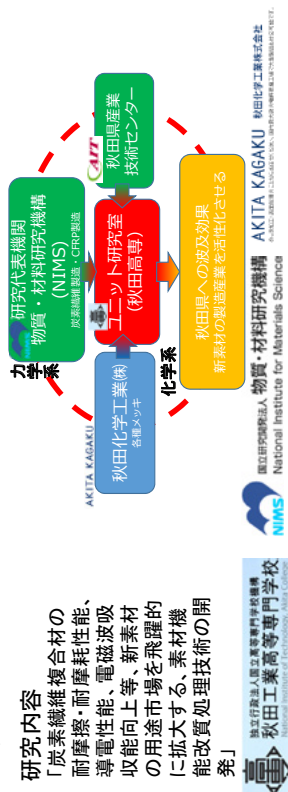
共同・受託研究事例 1



研究テーマ ユニット研究室による共同研究促進事業

国内研究:

「炭素纖維複合材の耐摩擦・耐摩耗性能、導電性能、電磁波吸収能向上等、新素材の用途市場を飛躍的に拡大する、素材機能改質処理技術の開発」



50

共同・受託研究事例 2

研究テーマ
次世代半導体基板研磨システムに関する研究開発

SiC、GaNなどのパワー半導体向け難加工性材料の高効率CMP技術の創出を目指し、従来のCMPプロセスに電界制御技術を活用することによって、良好な研磨特性が得られる新しい加工方法を創出する。



66

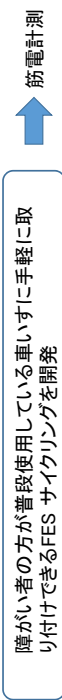
共同・受託研究事例 3



研究テーマ

下肢障害者のための自転車ユニットを用いた筋電計測に関する研究

秋田県(あきた)産学官連携未来創造研究事業)



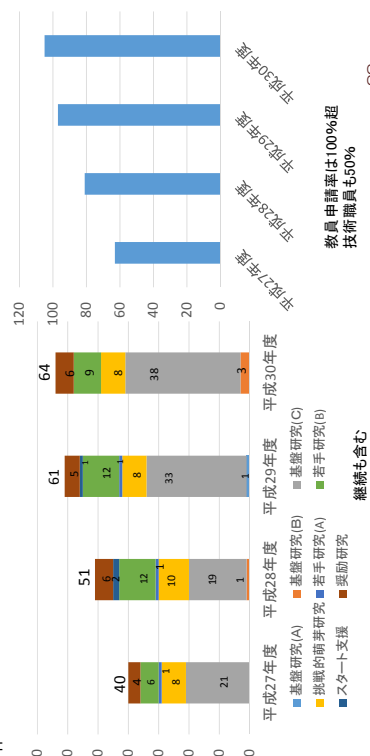
78

科研費申請への取り組み



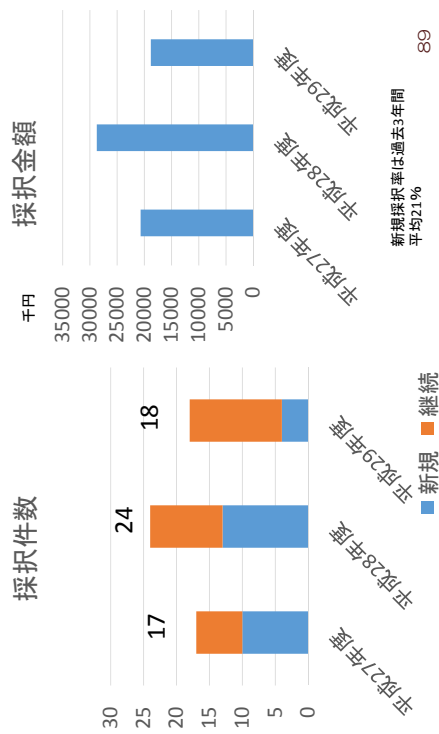
申請件数

科學母





科研費申請への取り組み



89



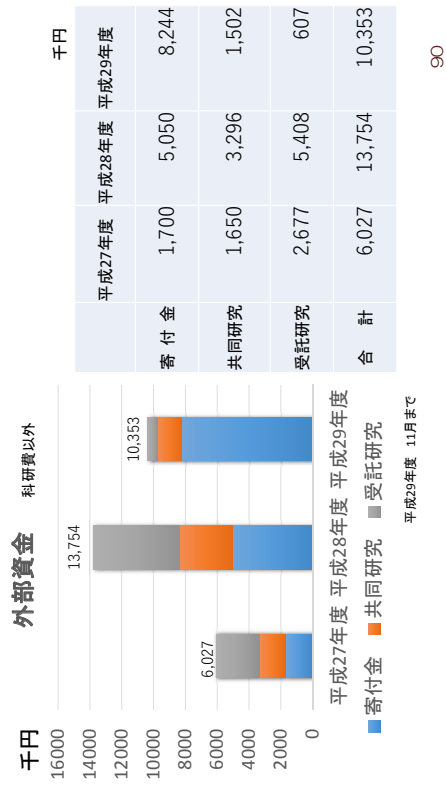
直面する課題と展望

1. 専攻科の特例適用認定をバネに
グループ化により研究業績の増強
2. 科研費 採択率向上 基盤(C)から(B)への展開
3. 各種外部資金への挑戦
(企業・地方公共団体との共同、受託研究)

91



外部資金の獲得状況



90



独立行政法人国立高等専門学校機構

秋田工業高等専門学校

National Institute of Technology, Akita College

平成30年3月発行

〒011-8511 秋田県秋田市飯島文京町1番1号

TEL 018-847-6107 (企画室)

FAX 018-857-3191

E-mail kikaku@akita-nct.ac.jp

HP <http://www.akita-nct.ac.jp/>